
新世界

北極星 1 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世界

【Nコード】

N1528D

【作者名】

北極星11

【あらすじ】

ミコト（普通の高校2年生）が、現代の心に棲まう病魔と対峙する物語。青春有、恋愛有、ちょっと現実離れた要素もあり。現代をどう生きるかという問いに、主人公の生き様を通して考えていく。後書きには、筆者のお勧めコーナー有！見てね^^ようやくですが、総アクセス2000突破！ありがとうございます！

第1話 く現代に潜む影く（前書き）

初めまして。「新世界」というタイトルは、新しい感じ方、考え方のある世界、見えない存在だけど、そこにあるもう一つの世界という意味で新世界というタイトルにしました。

個人的には、のんびりとした感じの小説が好きなのですが、どういう小説になっていくかはまだまだ分かりません。アニメ的な要素が強くなるかもしれません。

気長に付き合っただけだと思います。

第1話　く現代に潜む影く

「いただきまーす。」

「おつ、うまそうだな。その唐揚げもらい！」

「何、この唐揚げはだな、九州に住んでるおれのじいちゃんがな、

…」

「いただきっ」

「おいつ、この」

「そんなすねんなって。わるかったわるかった。」

「ムスッ」

「まったく、ミコトは食い物のことになるとすぐ意地張るよな。」

「おれはいつもばあちゃんに食い物を粗末にしちやいけねえっていわれてんだよ。」

「何言ってやがる。自分が食べたただけじゃねーか。って、いや、わるかった。そうだな。俺がわるい。たしかに。・・・あー、もうすぐ授業始まるぞ。いくか。次なんだっけ？」

「まったく、ちょういいいな。今度から揚げ返せよ。次は、体育だよな。」

「おつ、体育か、やったな。」

「シンジは体育そなたににくいじゃないじゃん。」

「いいんだよ。俺は、サトミちゃんと同じグループだから。」

「ああ、そうね。（この前は別の子の名前いつてたぞ…）。」

「さて、教室にもどって着替えるか。」

（あれ、何か校内の様子がおかしいか？）ミコトは3階の窓越しに体育館に生徒がたむろしているのを見かけた。

「あれ、なんだろう？」

そのとき、校内放送が校舎に響き渡った。

「『緊急連絡です。生徒のみなさんは、至急、教室にもどりなさい。』

繰り返します。至急、教室にもどりなさい。』」

「どうしたっていうんだ？」

「なんだろうね。まあ、いわれなくても教室にはもどるけどね。」

ミコトとシンジは少し急ぎ足で教室にもどる。（何かあったんだよな。なんだろう。胸がそそわする。）他の生徒も教室にもどってきた。サイレンの音がする。

「警察だ。救急車も。」

「なあ、何があったんだ？」

「あれ、まだもどってきてない子がいる・・・、この席は、…サトミ？」

「あつ、本当だ。」

教室のドアが開き、担任の尾崎が入ってきた。（そんなに神妙な顔して、どうしちゃったんだよ？）

「みんな、そろっているか。」

聞いたそばから尾崎は顔をしかめていた。なにやらサトミの空席をみている。

「サトミさんがまだきていません。」

誰かが先生に報告した。

「…知っている。みんな、いずれ、わかることだから、君たちには今から伝えようと思う。さきほど、山上君が…」

尾崎は目に涙を溜めていた。（山上？サトミのことだ。なんだ、この心臓の高鳴りは…。シンジ、どうしてそんなに顔が赤い？）

「…救急車で運ばれた。」

「えっ」ざわつき始める教室内。

「どうしたんですか？」

「放送がはいるまで、教室内に待機。帰りの仕度をしていなさい。」
教室をとびだすように尾崎は出て行った。

「自殺？」携帯を見ていた一人の生徒がいった。他の生徒もそれに群がる。（まじかよ。）シンジは、まったく動かない。

「シンジ…どうした？」

「いや、なんでもない。」

（自殺？うちの学校で？ニュースで最近話題になってるって思うことはあったけど、まさか、同じクラスで？いや、誤報かもしれない。なんでこんなにどきどきする？それに、どうしてシンジはあんなに顔が赤いんだ？何か知ってることがあるのか？）

第1話 く現代に潜む影く（後書き）

御一読ありがとうございます。

レスもおまちしております^^

第一章がいきなり過激になった感もあり、反省しております。文章がつたなくて、本当に申し訳ないですが、おいおい改善できればと思います。

筆者お勧めコーナー

ここでは、好きな漫画や小説やいろいろなものを紹介していきます。第一回目の紹介は難しいですね。

うーん、第一回目にふさわしいか分からないけど、

「天空の城ラピュタ」がいいですかね。

シートやバズーとか、海賊の名前覚えてますか？

第二回は、もっとマニアックなものを紹介したいと思います。

海賊のおばさんの名前も第二回の後書きに^^

第2話 〽自殺の理由〽（前書き）

こんにちは。第2話に進んでくれてありがとうございます。
シンジとミコトのやり取りがメインです。
ミコトの妹のチサも登場します。

第2話　自殺の理由

あやふやな情報が確信に変わったのは、やはりTVのブラウン管を通してだった。神城高校^{かみしろ}2年生のAさんが、体育館倉庫で首を吊り自殺。（…ぜんぜん実感がわかない。なぜだろう。あのときのシンジの顔、きつと何か知っている。できれば、関係がないにこしたことはないけど。それともシンジは本当にサトミが好きで固まってただけなのか？）

翌日の学校は臨時に休校となった。

「ねえ、お兄ちゃんの通ってる学校って、結構頭いいよね。」

「世間一般にはそういわれているけど。どうしてそんなこと聞くんだ？」

「うーん、なんで頭いい人が自殺なんてしちゃうのかなって思っ

て」

「そうだよな。よっぽど覚悟がないとできないよな。」（そう。何かがあったんだ。）

「なあ、チサは…（自殺を考えたことあるかなんて聞けないな…）どこ受けるんだ？」

「えっ、まだ私中2だよ。あんまり考えてないんだ。お兄ちゃんとおんなじ高校にしようかなって思ってたんだけど。」

「そうか。まあ、悪くないと思うぞ。」

（そう。うちの高校は悪くないと思う。サトミがいじめられているっていうか、うちのクラスにそもそもいじめはなかったはずだ。なんにも起こらない。いや、原因があるとすれば、…成績が下がったか？家庭の問題？失恋？考えてみればいろいろとあるな。）

「…ねえ、お兄ちゃん、聞いている？」

「えっ、うん。何が？」

「何がじゃないよ。もう、お兄ちゃんは、何か考え出すとすぐマイワールドに入っちゃうんだから。…サトミさんってどういう人だっ

たの？」

「えっ、どうしてサトミって名前知ってるの？」

「そりゃ私だって少しくらい情報網はあるわよ。もう中学2年生よ。」

「そうなのか。サトミって子か、…どういつ子っていわれても。まあ、顔はかわいいけど、そういえば、シンジはサトミにホの字だったな。あとは、おとなしめかなあ。」

「へえ。でも、不思議だよな。自殺なんて、…。」

（シンジに電話してみよう。もし、関係があるんだったら、話を聞いてやらなくちゃいけないしな。）

少し重く感じる手を伸ばし、電話に手を使った。ミコトは携帯などとはもっていない。専ら家庭の電話機で友達とやり取りしている。

「なあ、シンジか？今だいじょうぶ？」

「ああ。」

「あのさ、昨日のことだけど、シンジは、何か知ってるのか？」

「…ああ、いや、そんなことは関係ないと思うんだけど…。」

（シンジがいつに無く真剣だ。やっぱり、心当たりがあるんだろうか。）

「あのさ、おれ、サトミに告ったんだ。」

「えっ、…そうか。（シンジ、本当に好きだったんだ。ってか、俺にも相談しろよ。）どうだった？」

「いや、だめだったんだ。ただ、このまま友達関係でいようって約束して、それから、…昨日が告ってから3日目だったんだ。俺、何かなんだか分かんないんだよ。」

「落ち着けて。シンジは告った方なんだろ。もし自殺するんなら普通はフラれた方がするって。」

「だよなあ。」

「あっ、ごめん。シンジ、自殺しないよな？」

「当たり前だろ。振られたことは一度や二度じゃないぜ。」

「さすがだな…。」（よかった。そんなことか。サトミの自殺はシンジのせいじゃない。）

「ありがとな。話せて、気がちよつと楽になった。」

「いいよ。俺もちよつと気になってて、知りたかつたんだ。まあ、シンジが悩んでそうなのが分かったから電話したんだけど。」

（不思議だな、明日から、サトミがいない学校生活が、また、普通に始まるんだろうな。）

第2話　く自殺の理由く（後書き）

御一読ありがとうございます。

よかったらレスお願いします。

こんな小説でも、読んでもらえるというのは嬉しいです^^

筆者コーナー

ラピユタの女空賊の名前は、ドーラですね^^

今回の紹介は、バンブオブチキンの「花の名」です。

「生きる力をくれたから、生きているうちに返さなきゃ」

という歌詞がいいですね。よかったら聞いてみてください^^

Y・T U V Eで聞けます^^

第3話 少年と少女の事情（前書き）

第3話です。

いよいよ新世界のメインである、守護神との接触です。

今までシリアルでしたが、基本的にはこれからの話のほう为本題に近いです。

ただ、シリアルな部分もださないと、現代の心の問題に迫れないと思います、苦手ですが

シリアルな心の描写もしていけたらと思います。（だったら書くなよ・・・ですね^^:）

サトミの心の声から始まります。

第3話　少年と少女の事情

「ねえ、シンジ君。どうして私なんかに告白したの？わたし、もう嫌なんだ。男の子にふりまわされたり、勉強したり、親の顔色みたり、いろんなこと我慢して。」

「えっ。別に、大して考えて無いんだけど…。ほら、体育で一緒のチームで楽しくやってるじゃんか。サトミも楽しくやってたでしょ？だから、もしよかったら、付き合えないかなと思って。」

「楽しく？そうね。男の子はいいわよね。何でも本心でいえて。どうして楽しいと思ったの？わたし、別に楽しいなんて思わなかったわ。みんなに合わせて、笑ったりしていただけ。」

「えっ、そうなの？」

「そうなの。」

「なんか、サトミって、思ったより、冷たいよな。」

「それはあなたが勝手にそう思ってたいただけでしょう。」

「いいよ。結局、だめなんだろう。別に。いいや。なんか、そんなやつて思わなかった。」

「そうね。わたしも、…（もういやっ！もういや、もういや。）」

「えっ、なんで、泣くんだよ…。」

「あなたに関係ないでしょ？ほっておいてよ。」

（おかしいの。私の心はおかしいの。告白されて、少しは嬉しいはずなのに、悲しいの。告白してくれても、すぐに冷たくされる。お父さんも、お母さんも同じ。いつも冷たい。そりゃ、私だって家に帰ったらわがまま言ったり、言うこと聞かなかったりするけど、でも、がんばってるじゃない。どうして、誰もわかってくれないの？誰もみてくれないの？）

「あのさ、一応、俺が言い出したことだから、…ごめんな。」

（あやまつてもだめよ。あなたが私を好きって言ったのに、「そんなやつって思わなかった」っていったじゃない。どっちよ。私って、

そんなやつなの？そんなやつ…）」

「まあ、これからは、いつもどおりの友達として、やってこうな。」
（信じられない。そんな、やっていけるわけ無いじゃない。いや、シンジ君も嫌。）

「そうね。（あなたとは、関わりたくないの。みんなとも…）」

「サトミって、一ヶ月くらい前からなんか変わったよね。」

「家で何かあったのかな？」

「ちよっと暗くなったよね。」

「うん。前まで、明るかったように思えたのに。」

「あつ、サトミがこっちくるよ。」

（こっち見て何か言ってるわ。どうしよう。怖い。いつから？どうしてこんなに友達が怖いのか？おかしいよ。わたし、おかしくなっちゃったの？）

「あつ、どうしたの？」

「ううん、なんでもない。」

「そう。…あのさ、何か言いたいことあったら、直接言ってくれる？」（えつ、こんなこと私がいつてるの？）

「えつ。ほんとに、なんでもないから。」

「何、あの言い方。ウザイよね。」

「どうかしてるよね。」

「サトミ、また漫画ばかりよんで。勉強はしたの？」

「ほっておいてよ。後でするから。」（もう、家で好きなことしたっていいじゃない。）

「いつも後で後でって言ってるでしょ。」

「いいのよ。うるさいなあ。母さんはいいよね。仕事もしてないし、宿題だって無いし。父さんがいないと何にもできないじゃん。」

「どうしてサトミはそんなこというの？信じられない？」

（もういや、ほっておいてよ、学校？家？わたしはどこにいればいいの？誰からも愛されない。誰からも認められない。）

「なんで母さんは分かってくれないの？」

「あなただって、母さんのことわからないじゃない！もう高校生でしょ。甘えるんじゃないわよ！」

（もういや、もういや、もういや、全部いや、もういやー！）

（あーあ、どうして私、生まれてきたんだろう。さみしいな。きつと、私だけだよ。みんなはあんなに笑ってる。いいなあ。もう、わたしには、無理だよ。）

（ちょっと待ってよ。待って。何これは？サトミの心？うそだろう。）

「……く運びなさい。おいつ。神崎。神崎！」

（ここは？保健室？どうしてこんなところにいるの？そうか、尾崎先生に、サトミの机を運ぶように言われて、それで……。うっ、思い出した。あれは、夢？机から声が聞こえたんだ。）

「神崎君、大丈夫？」

保健の浅井先生だ。相変わらず香水が強い。嫌なおいじゃないけど、きつい。なんで保健の先生って近くにいとどきどきするんだろう？これが大人の魅力ってやつか？

「あつ、ありがとうございます。」

「びつくりしたわ。いきなり尾崎先生が『診てくれ』って運んでくるんだもの。」

「あつ、そうだったんですか。あの、浅井先生……」

「あら、どうしたの？」

神崎ミコトは、汗を一筋ながしながら、浅井先生の背後を指さした。「ところで……その、後ろのおじ……。」

（やばい、まだ夢の中にいるみたいだ。……口も、体も動かない。お

い、あんた誰だ？誰なんだ？なんで体がすけてるんだー！

「ん？何？どうしたの？」

（確かにいる。まだこちらを見てる。）

「浅井先生、お電話です。」

「はい。今行きます。それじゃ、神崎君、ちょっとここで待っていてね。」

（これは、やばい。開け。俺の口。なんだよ。これは…。）

「あの、…どなた…です？」

「ほうほう。みえるんじゃないな。ほうほうほ。お主は、なぜ生きてるんじゃない？」

「はあー？」

第3話 少年と少女の事情（後書き）

今回はちょっとシリアスでした。

この話から、だいぶ方向が変化します。

でも、作者の意図は、どちらかというと初めから霊とか、スピリチュアルとか、

そういうのを目指していましたので、ようやくここで主人公が目覚めるといったところですね。ちょっと遅いですね。

アニメ系になるかもしれませんが、「現代の生き方を問う」という大それた主題は忘れないようにしたいと思います。

では^^

筆者コーナー

今回の紹介はベルダンディーです。

漫画です。

漫画のタイトルは分かりますか？

名作ですね。

森里恵一のサイドカーつきバイクがいいですね。

第4話　く普通じゃない生活の始まりく（前書き）

第4話になりました。

細かいところを書いてみると、話というのは進まないものですね。気長につきあってももらえればと思います。

では、どうぞ。

ちなみに、タイトルを考えるのはなかなか苦しいときがあるので、あまりにも内容と合ってなかったら、具体的な例を沿えて教えてください。^^

では、第四話をどうぞ。

第4話　普通じゃない生活の始まり

「どういうことですか？」

自然と話せるようになった。体を縛り付けている感覚もだんだんとなくなった。

「わしを、誰だと思う？」

「あの、霊とか、そういう感じのものと。」

「うーん。まさに、それ。」

「それなんだ…。ははは。」

「ちなみに、わしは、おぬしの守り神といわれるものじゃよ。」

「ええー。そ…そうなんですか。」（もっと美人の人がよかった。つて、この人、人の心がよめたりするんじゃないのか？）

「そうじゃ。そう、心も読める。ということじゃよ。まあ、形は、おぬしの思いによって変化するが、おぬしがこの形を望んだんじゃよ。」

「ははは…」（まじっすか。頭がこんがりそう。何で居るんすか？）

「平たく言うと、ああ、おぬしの言った、なぜ居るのかという問いだが、…お主に、ちと、使命を与えにな。」

「使命？なんですか？」（真実味があるような、ないような。夢、じゃないよな。爺さん以外ははっきり見える。）

「虚無きよむという物をしておるか？」

「むなしさのことですか？」

「そうじゃ。虚無きよむとは、おぬしの中にも存在する。人間誰しも虚無がある。」

「はあ。」（いきなり何を言っただろう。いや、なんとなく分かる気がする。最近良く考える。自分がどうして生まれてきたのか。何になるうとしているのか。）

「うむ。お前たちが生まれてくる意味、使命、人にはそれぞれの役

割がある。しかし、ここ何年かの間に、人々の心は虚無におおわれ、悲しみが心を満たすようになった。」

「そうなんですか。」（自分の中にもある虚無…あんま、意識したことないな。）

「虚無か、どこでも感じられる。何をしても面白くないと感じたり、人との会話を恐れたり、自分を隠したり、または暴力的になったり、そして、最たるものは生きる意欲の欠乏じゃよ。」

「生きる意欲の欠乏？（はっ、サトミ…）自殺？」

「難しい話になるが、虚無が心の中で拡大すれば、自ら命を絶つという行動をとる。これは人間の知能が著しく発達してしまったゆえにもたらされることもある。ただし、本来は生命力にあふれ、生きる力をもって生まれてきているはずなのじゃ。」

「どうすればいいんですか？」

「わしがおぬしに特別な目を与えてやる。なあに、簡単なことじゃよ。虚無を見つけ、その原因を解決してやるのじゃ。それじゃ、いくぞっ！」

「ええっ、まだ何も…（言っていないぞ！）」

「…きて、起きて、神崎君、神崎君…。」

うつ、なんだ、いい香りだ。この香水のは…。

「はっ、浅井先生。つつ。」

「大丈夫？やっぱり、まだ調子悪かったの？今日はもうお家に帰るうか？」

「いえ、大丈夫です。（お家って、小学生じゃないんだから。）」

「あら、神崎君、その目、どうしたの？」

「えっ、目？」

「青いわよ。」

第4話　く普通じゃない生活の始まりく（後書き）

ミコトの目が青くなっちゃいましたね。

別に青かろう赤かろうがそのままだろうがどちらでもいいのですが、個人的に変身系が好きなのでこうしてみました。

まあ、それで何かと細かい設定に苦勞してしまいますが・・・。

是非、一言でいいのでレスお願いします^^

筆者コーナー

前回の問題の答えは

「ああつ、女神様」です。

あののんびりとした世界観が好きです。

今回のお勧めは、

「トランスフォーマー」

です。あのCG処理はすばらしいです。一押し映画です。

第5話 く青い目のミコトく（前書き）

第5話です。

伏線が多くてすみません。

気にしないでください。

個人的には、第10話あたりまでは、身辺整理のようなものです。

第10話あたりからバトル系も入ってきます。

どうなっていくのでしょうか？

作者も心配ですが、「現代の生き方を問う」という主旨を忘れないようにがんばります。

（まあ、そんなことを考えずに読んでください。ただの漫画ですね
^^;）

第5話　青い目のミコト

（ほんとだ。青い。あの爺さんか。おい、守り神のおじいさん、聞こえるか？おいっ。これは何だ？おいっ。返事をしてくれよ。）

「うーん。それは無理ポン。」

「無理ポン？」

「えっどうしたの？神崎君？無理ポンなんて？かわいらしいこと言うのね。」

「いや、なんでもないです。」

（おいおい、今日はどういう日だ？どこに居るかな？ぼんぼんは？）

「あっ、この目ですけど、実は、カラーコンタクトしてたんですよ。」

「えっそうなの？わざわざ黒に？どうして？かつこいいじゃない。」

「いや、なんていうか、その、うちのひいじいちゃんが、外人で、たまたま、自分だけこんな目の色になっちゃって。（うまいうそだな…。）」

「そうなの？カラーコンタクトは？」

「えっ、ああ、ポケットに入れました。（入ってないけど。ばれるぞ…）先生には、元の目をみてほしくて…。（もう、やけくそだ！）」

くそっ、先生を見れない、絶対にばれる。ってか、何で俺の目は青くなっただんだよ。

「それは、あなたの守り神様のカラーだポン」

（ふっ、幻聴が聞こえる。ポンポンは、後で見つけてあげるから、ちよつとだまつとってくれよ！ほんとと、訳がわかんないぞー！）

少しずつ目線を上げると、浅井先生の背後に黒い影が目についた。

「浅井先生、」

「えっ、何？」

「言わないほうがいいポン。」

「いえ、なんでもないです。それじゃ、だいぶ楽になったので、教室にもどります。」

「あら、そうね。でも、もう、ホームルームの時間よ。今日はもうこれで帰ったほうがよさそうね。」

「そうだ。この目のまま外を歩きたくないな。どうしようか？とりあえず、

「ありがとうございます。それじゃ、もどります。」

「そうね。また、いつでもいらっしゃい。ウフツ。」

「照れてるんだポン。」

廊下を歩くミコト、それにふわふわついてくる見たことも無いような小動物。

（人間ってすごいよな。免疫っていうのか、慣れると、どうってことないよな。動物がしゃべろうが、浮いてようが、透けてようが。）

「あのさ、ポンポンは、何？」

第5話 く青い目のミコトく（後書き）

主人公のサポートキャラ（？）のポンポン登場です。

新キャラが少ないか多いか分かりませんが、

作者が覚えきれないのでそんなに出不さないと思います。
いつでも感想お待ちしています。

筆者コーナー

サポートキャラっていいですね。

ドラえもんなんて、まさにそれですね。

召喚とかも好きです。

マニアックな作品で言うと、

「神様のつくり方」という漫画も好きです。

神様系とか嫌いじゃないですね。

女の子がどんどん強くなっていきますが、
ご愛嬌です。

第6話 くその名はポンポンく（前書き）

こんにちは、作者です。

たまに振り返って自分のを読んでみると、

全然だめな文章ですね。

まあ、ちょっとはいいところがあるだろうと思っているから
書いているわけですが。

ポンポンとミコトのやり取りです。

なぜミコトが見えるようになったのかは、今のところ使命というこ
とでお願いします。

もしかしたら、もっと深い理由を後々書くかもしれませんが・・・。

第6話　その名はポンポン

「失礼ね。僕の名前はポンテ・ポンタ・ラクリマス・リータだポン。」

「あつ、じゃあ、初めのほうとつて、ポンポンでいいよね。」

（もしかして、これも、守り神？）

「にひー、僕も君の守り神さ。」

「ありがとう。」（まじですか？守り神って誰でもなれるわけ？知らなきゃいいことって、世の中にはいろいろあるよね。）

「誰でもなれるし、誰にもなれないポン。」

「?????」（ちよつと、分からないな。いや、全然、分からない。）

「あのだ、ポンポンは自分を守ってくれてるんだよね。だから守り神なんだよね。」

「うん。そうだポン。」

「どういうことをしてくれてるの？」

「そりゃ、一番は、ミコトの魂の成長だポン。」

「そうなんだ。で、どんなことをしてくれてるの？」

「うーん、言っても難しいから、また今度にするポン。そうそう、青い目のことだけど、まあ、そのうちみんな、なれるんだポン。」

「カラーコンタクトでもあればなあ。」

「じゃあ、ポンがフィルターになってやるポン。こうやって、これで他の人にはミコトの目の色は黒く見えるポン。…ふう、でも、体の形を変えるのは、疲れるからやめるポン」

（なんて自分に甘いんだ…本当に守り神なのか？）

「ぼ・ぼくは本当に、ミコトの守り神なのに…いいんだポン…ウエー…」

「あつ、ごめん。」

ミコトは、心が読めるポンポンにひどいことを思ってしまったと思

い、後悔し、ポンポンをなでようとした。瞬間、

「ポンー。」

ポンポンの体が薄青色に輝き、ミコトを包み込んだ。

「あっ、…あつたけー。そう。この感覚。ポンポン、本当に、おれ、守ってくれてたんだ。」

自然と体があつたかくなる。この感覚。苦しいときや、つらいとき、胸が締め付けられたとき、布団中入って、涙を流した後に、何度か何かに体がつつまれた気がした。ポンポンだったのか？」

「いや、守り神なんだから、ポンポンじゃ、失礼だよね。ポンポンサンか？」

「ポンポンでいいポン」

「どう？わかったポンか？守り神は、何があつても、憑^ついている人の支えになるんだポン。それは、絶対なんだポン。」

「そうなんだ。心強いよ。でも、じゃあ、どうして自殺をする人がいるんだ？」

「さすがミコト、勘が鋭いポン。」

「何でだと思うかポン？」

「なんでだろう？守り神がついていない人がいる？とかかな？」

「うーん。鋭いポン。」

「ポンポンも人と一緒だポン。何かを食べないと生きていけないポン。」

「食べる？何を食べてるの？」

「『想い』だポン。特に、あつたかい『想い』だポン。」

「へーそうなんだ。」

「そうなんだポン。あつたかい想いっていうのは、…うーん、うまいえないポン。」

「でも、すごいよ。ポンポンは。そんな、人を幸せにする力があつて。っていうか、今まで守ってくれてたんだよね。ありがとう。」

「ニヒヒヒー。いいってことポン」

第6話 くその名はポンポンく（後書き）

ポンポンのような守護神が、全ての人にいるというのは、これは個人的に作者が信じている世界観です。

文章は滅茶苦茶ですが、この世界観を体感してもらえればと思います。

次の次の話あたりから、ミコトが新しい能力に目覚めてきます。新キャラ（女）も、もうすぐ登場予定です。

筆者コーナー

今回のお勧め？は

エヴァンゲリオンです。有名ですね。？がついたのは、25、26話の終わり方が訳がわからないということです。つつこみどころも満載のアニメではなかったかと個人的には思っています。

テレビアニメとしては革新的でしたよね。

是非、続きを放映して、すっきりさせてほしいですね。

第7話　動き出した齒車

ミコトは誰もいない教室に戻り、帰り支度をした。

結局ミコトはカラーコンタクトを入れることにした。深く帽子をかぶり、眼鏡屋に行った。

（あーあ、財布の中身が空っぽだ。せつかく溜めておいたのに。でも、これで家で変なこと聞かれなくて済むぞ。）

あれから、少し考えた。自分は守り神の爺さんじいに、虚無きよむが視える目をもらった。確かに人間多少の違いはあれ、黒い影がみえる。きつと、あれが虚無だろう。

「うーん、あれくらいならいいポン。放っておいた方がいいポン。」
「そうなの。ってゆうか、どうすればいいのかなんて、聞いてないけど。」

「そうそう、一つ、注意してほしいポン。虚無は、全部が全部悪いわけじゃないんだポン。だから、少しは虚無を残しておかないといけないんだポン。」

「残すったって、虚無の取り払い方なんて知らないぞ。あの爺さん、いや、守り神のおじい様は、何にも言わずに行っちゃったからな。」

「ミコトの体に、どこか変わったところはいいかポン？」

「いや、うーん、別にないけど。目以外は。」

「そっかポン。きつと、大丈夫だポン。それより、ミコトに心してほしいことがあるポン。」

「何？」

「ミコトは、黒い影が見えるって言ったポン」

「うん。だって、爺さんがそうしてくれたんだろ。その割には、放っておいていいって言うし。良く分からないよ。」

「うん。そこなんだポン。ミコトは、これから、虚無と戦うことに

なと思うんだポン。」

「虚無と戦う？あんな影と？無理無理。ってか、おそつてくるとか、そついうの、ぶっちゃけやめてほしいな。」

「残念だポン。虚無は、きつと、今のミコトを襲つてくるポン。」

「黒い影が？そんなようには見えなかった。」

「黒い影とは、ちよつと違うポン。虚無は、確かに誰にでもあるんだポン。でも、虚無を自然界の力以上に膨らませるやつがいるんだポン。」

「それって、悪霊の仲間とか？」

「まあ、そんな感じポン。ポン達は虚無羅きよむらっていつているポン。それは、影ではなく、実際に形をもっているんだポン。だから、やばいのはすぐに分かるポン。」

「そうか。それに憑つかれてる人をさがして、そいつをやつつければいいんだ。」

「うーん、そんな感じポン。」

「で、どうやってやつつけばいいの？」

「うーん、ポンが知っているのは、まずは引き離して、虚無羅きよむらに触れて、呪文を唱えるんだポン。」

「襲つたりはしてこないのか？」

「ポンが知っている限り、かなり襲つてくるポン。」

「心が読めるから、正直に言うけど、やりたくないな。」

「そんなこと言わないポン。虚無羅きよむらに憑つかれた子は、事件を起こしたり、自殺したり、いいこと無いポン。それに、虚無羅は、…。うん、なんでもないポン。」

そんなことを話したり、考えたりしながら、すでにご飯を終わらせ、シャワーを浴び、寝る仕度をしていた。

（そつか、でも、安心したことは、うちの家族には虚無羅は憑ついてないってことだ。さすが、守り神がいてくれることだけはあ。あれ、呪文とか言ってたよね？言えるのか？全然知らないぞ。まあ、

明日、聞こう。ああ、やっぱり、こうやって目に見えると、全然違うな。あつたけー。ポンポンが守ってくれてんのかな？サンキュー。おやすみ、ポンポン。）

第7話 動き出した歯車（後書き）

こんにちは。作者です。

人の影ってなんなんでしょうね？

この説明は少し苦労しました。

みんな心の影の部分があるので、それが見えたらという仮定で作りました。

分かりやすいように、虚無羅という存在も作りました。

今回は、この虚無羅が出てきます。いわゆる悪役ですね。

悪役としては魅力が無いですが、魅力の有る悪役は後々登場予定です。（MAYBE・・・）

筆者コーナー

みなさん、「シャーマンキング」って、知ってますか？そう、霊が乗り移ったりする漫画です。

あれも嫌いじゃないですが、個人的にはあの人が描いた、前作の「仏ゾーン」がかなり好きですね。

仏像の世界に惹かれました。

第8話　人の影に住む者

「おはよう。ポンポン」

「おはようポン。」

「なあ、不思議に思うんだけど、ポンポンが見えなくなるときはあるの？」

「うーん、多分、まだずっと見えるポン。」

「なんで、他の子には見えないんだ？」

「うーん、そりゃ、見えないのにこしたこと無いポン。誰だって、見られてたら嫌なときはあるポン？」

「はは、そりゃそうだ。でも、ほんっと、どうして自分なんだろう？」

「まあ、いろいろ理由はあるポン。それに、ミコトだけって訳でもないポン。」

「えっ、そうなの？」

「そうポン。見える人や使える人、呼べる人とか、いることはいるポン。」

「へえ、そうなんだ。」

「今日は、学校へ行くポン？」

「そうだけど。」

「気をつけてポン。人が多いってことは、それだけ虚無羅きむらがいる可能性が高いポン。」

「そっか、この前は人目に付かないよう、すぐ帰っちゃったもんなで、もし虚無羅にであつたら、どうすればいい？」

「うーん、うーん、どうしよう？わかんないポン。」

「だいじょうぶかな、おれ。じゃあさ、虚無羅が襲襲ってくると、どうなる？」

「きつと、痛いポン。今、ミコトは見える状態ポン。そして、ポン

にも触れるほど強い感覚を持っているポン。といういうことは、きつと、襲われたら、痛いポン。」

「うっ、痛いじゃすまなそうない方だぞ…。でも、ポンがついてるから、大丈夫だよな？」

「何言ってるポン？ポンは、ミコトに話すことは出来るけど、ミコトがやられたら、ポンも消えてなくなるポン。」

「えー、守り神だろ？」

「それとこれとは、話が違うポン。」

「ああ、学校へ行くのが嫌になってきた…。唯一の救いは、虚無羅を見たことが無いってことかな。実感無いから、今はあんまりこわくないけど。…ポンポン。死んだりすることとかないよね？」

「ごめんポン。多分、大丈夫だと思うけど、無いとはいえないポン。」

（ふっ、そうか。使命が与えられて、ちょっと特別だっと思ってたけど、参ったなあ。なんか、それほどいい役をもらった気がしない。どうか、虚無羅がポンポンみたく弱そうでありますように。）

「ポンポンみたいには余分だポン！」

「ああ、ごめんごめん。」

「それじゃ、いってきまーす。」

「いってらっしゃい。気をつけてね。」

第8話　く人の影に住む者く（後書き）

いよいよバトルモードの助走段階です。

ポンポンとのやり取りが多いですが、ご愛嬌です。

次回はいよいよメインとなる新キャラ登場予定です！！

筆者コーナー

バトル系といったら、やっぱりセイント聖也ですか。今のチャンピオンでやってますね。今のは見ていませんが。鎖使いの名前なんでしたっけ？ネビラチェーン！

セイントクロスかつこよかったです。

第9話　　登校

第9話　　登校

虚無^{きよむ}が「見える」ようになってから、初めての学校。いつものように自転車にまたがり、わずか12分の道を風を切るように学校へ向かった。やはり、行き交う人には、黒い影が見える。しかし、その影も多少の差はあれ、気にするようなものではなかった。

「なんだろ？怖いはずなのに、すこしどきどきしてる。虚無^{きよむ}羅^いに会いたいのかな？いや、会いたいというよりは、見てみたいって感覚だな。きつと。」

「ポンもよく分からないポン。虚無羅を成仏させてあげられれば、苦しんだり、悩んだりする人が減るポン。だけどやっぱりポンも怖いポン。」

「おいおい、守り神様がそんなこといってどうするんだよ。」
左手に正門が見える。いつものように駐輪場に自転車を置き、ふと顔を上げるミコト。校舎に目をやる。階段をあがった二階が玄関になっている。

（ああ、学校が休校になって、翌日倒れて保健室。それが昨日。そして今日か。なんかいろんなことがありすぎて、なつかしく感じるぜ！まあ、みんなに影がついて見えるってこと以外、いつもと変わらないか。そうだ、シンジは来てるかな？昨日の朝、会ったときには、やっぱり少し元気が無かったようだからな。シンジの自転車は、まだないか。いつもは自分よりも早く来ているはずなのに。）

「神崎君、おはよう。」

ふと後ろから声をかけられた。同じクラスの山口ミキだ。背が高いけど裏表の無い話しやすい子だ。身長は170センチ弱だろう。自分がぎりぎり170センチを超えた172センチだから、自分はこの子より大きいってことが少し嬉しい普通の高校2年生だ。

「ああ、おはよう。」

ミキの笑顔と明るい声に少し顔が紅色に染まってしまう。

「やっぱり、見てるんだよな？」

「気にするなポン」

「別に、好きって訳じゃないけど、やっぱり、女の子に弱いっていうか…かわいいとは、思うけど…」

「知ってるポン。いいポン。健全だポン。」

「それより、一つ思い出したポン。虚無羅きよむらに会ったら、目を合わせないようにするポン」

「まじ？目が合うと石になったりするのか？」

「石にはならないけど、ミコトの目は気付かれるポン。襲ってくるということポン。」

「ああ、いい忠告をきいたよ。絶対気をつける。っていうか、逆に、目を合わせなければ、大丈夫っていうこと？」

「おそらく、相手は気がつかないポン。相手は、どちらかというと、本能で生きているよなものポン。」

「今のところ、いないよな。」

「大丈夫。いないポン。」

第9話 〽登校〽（後書き）

すみませんでした。

山口ミキは、フルネームを使ったのですが、かなりのサブです。メインキャラは次回です。ごめんなさい。

筆者コーナー

今回の紹介はバンブオブチキンの「アルエ」です。

白いブラウス似合う女の子〽から始まるアップテンポのリズムと
いやらしくないひびきのよい歌詞がすきですね。

第10話　く会い

「学校にいただけで、こんなにそわそわするなんて思わなかったな。」

自転車をおいた二人（一人と一匹）は、二階に上がろうと階段に足をかけた。そのとき、今来た駐輪場のほうから、珍しく悲鳴が聞こえた。

「きゃー。」

「どうしたんだ。」

登校をしたばかりの生徒が集まってくる。

「何を見てんだよ。おう、もう行くぜ。どけよ。」

この神城高校^{かみしろ}にしては珍しい、いわゆる不良だ。1年生と思われる少女が一人、殴られた形跡^{けいせき}もなく、倒れこんでいた。

それを見てごくりとつばを飲み込むミコト。

「あつ、いたポン。ミコト、今の不良グループの肩に乗ってるの、全部で3匹。いたポン。まずいポン。いきなり3匹は……。」

「ああ。よかった。予想してたよりは、まだまだ。……トカゲっぽいよな。」

3人の不良グループが歩き去っていくのを見届けるミコト。その肩には確かに黒く異様な物体がそれぞれ一匹ずつ乗っていた。体長は20センチほどだろうか。それはまさしくトカゲの形態をしていた。せわしく人の体を歩き回る影。これが虚無羅^{きむら}というものなのか。3人には影が見えない。おそらく3人の影を凝縮してあのような形になったと見るのが正しいだろう。

「だいじょうぶ？」

「ありがとう。だいじょうぶよ。ちょっと押されただけだから。」
さきほど倒れていた少女が起き上がる。周囲にいた生徒も安心した様子で、何かをつぶやきながら玄関へと向かい始めた。神城高校

では、珍しい光景だったのだろう。興奮気味の男子高校生、「なによ、やな感じのやつら。」と不平不満をぶつけている女子高生。いつもと違った情景が見受けられた。

「よかった。女の子はだいじょうぶそうだな。」

少し遠巻きに見ていたミコトは、ほっと肩をなでおろし、次に何をすればよいかを考えようとしていた。しかし、少女はミコトの方を見つめていた。

（あれっ、どうかしたのか？ なかなかかわいい子だな。）

野次馬連中も、その足が教室に向かいだした。なぜか少女はこちらに近づいて来るようだ。少し細身の体で、背もそれほど高くないその少女は、なぜか不思議な雰囲気放っていた。その少女が、栗色をした肩にかかるかかからない位の髪をリズムよくゆらしながら近づいてきた。

「おはようございます。」

その少女は、不意にあいさつをしてきた。（えっ、俺に？ もしかして、この子、俺に気があったとか？）

「ああ、おはよう。」（おっ、なんかドキドキする。）

「ずいぶんかわいいんですね。」

（はっ？）

第10話　く出会いく（後書き）

いつでもレス歓迎です^^

次回はこの少女の名前が分かります。

かなり物語りに関わってくるので、いいキャラにしていきたいとは思っていますが、どのような性格なのかは作者にも分かっていません。エ　ゲリオンの綾　レイをもうちょっとくだけた感じに考えてはいるのですが・・・。

というわけで、いつものように取り留めの無い終わり方ですみません。

次回も読んでもらえると嬉しいです。

筆者コーナー

ちなみに、エヴァンゲリオンを見たのは最近です。

これもY・tUBEで見ました。

今は「ああっ女神様」をみています。

第11話　く緑色の目の少女く

第11話　く緑色の目の少女く

（ずいぶんかわいい？俺のことか？何をいつているんだ？いや、かわいいのかな、俺…。んなわけないよなあ。…この子のバッジは、確かに一年生だよな。）

神城高校は学年に応じてそれぞれの胸にバッジをつけて識別している。

「ううんっ。君は、えーと、1年生の子だね。どうかしたの？」

「あなた、名前は？」

（あ…あなた？そ…その聞き方はなんだ？というか、おれの言ったことが耳に入ってないのか？）

「えーと、いいかな、君は、…」

ふと、その少女が手を伸ばす。不思議なことに先ほどまでごく普通の目をしていた少女が、明らかに輝きを放つエメラルドの色をした緑の目に変わっている。

「もしかして、君…。」

少女はミコトの目を見つめた。吸い込まれるような深い緑色の目にミコトはしばらく言葉を失った。なにやら少女は少し笑みを浮かべている。

「はじめまして。」

少女がミコトに話しかけた。落ち着いていて、なおかつ透き通るような声。ミコトはその声にどこか懐かしさを感じずにはいられなかった。

「ああ、はじめまして。」

（不思議な子だな。なんでこんなに落ち着いているんだろう。しかも、よく見ると肌の色すげー白い。はつきり言って、美人だよなあ。…やばっ。見とれてた。）

「私の名前は、山神セイラ。そしてこっちが、…」

少女の体が淡い緑色の光につつまれ、形を成すものが姿を現した。それはまるでゆりの花のように白く気高い雰囲気を漂わせていた。白い羽をもった天子のような守り神だ。

「おおつ。きれいだっ。」（うちのポンポンとはえらい違いだ…。）

「失礼ポンー!!」

「ああ、ごめんごめん。」

「ウフフ。ありがとうございます。私の名前はルシアン・ミシハルト・リリイです。リリイと呼んでください。」

「ああ、俺の名前は神崎ミコト。こっちが、えつと、…ポンポン。はじめまして。」

「よろしくポン。ちなみに、本当はポンポンじゃないポン。ポンテ・ポント・ラクリマス・リータだポン。」

（普通に覚えてなかった。ごめん、ポンポン。）

「あら、かわいらしい名前。初めまして。あなたの守り神は、空の性質ね。」

「えつ、そうなの？」

（なんか、知らないことばかりだな。空の性質って、冒険者のゲームみたいだ。）

「ええ。わたしもリリイが言ってくれたことしか分からないけど、それぞれの守り神には生まれ故郷があるらしいの。あなたは、どうして守り神が見えるようになったの？」

「えつ、どうしてって言われてもなあ…。どうしてっていわれて、すぐに返せる答えが無いんだ。いきなり爺さんみたいな神様が出てきて、使命を与えに来たとか言っつて、それでこの目になったんだ。君も、虚無きよむが視えるんだろ？」

そう言っつてカラーコンタクトをはずしてみせるミコト。ミコトの目もまた、青く輝きを見せていた。

「あなた、カラーコンタクトをわざわざしているのね。どうして？」
「どうして君はしてないの？と、こちらが聞きたいな。」

「見てて。」

セイラはミコトの目を見ながら、その場で緑色の目から、もとの黒い目へと変化させて見せた。

「す…すげー。」

「あら、そう？」

「そんなことできるんだ。」（カラーコンタクト買う前に知りたかった。俺の財布は空っぽさ…ふつ。）

「うん。でも、やっぱりカラーコンタクト、いいかも。そうか、その手があったわね。」

「どういうこと？」

「ええと、まずね、目の色を黒くするには、リラックスして、心の中で、『もどつていいよ』って優しく唱えるの。」

「こうか？どう？できてる？」

「おおつ。できてるポン。でも顔が微妙に怖いポン。」

「仕方ないだろ。優しく微笑ほほえんでる感じなんだから。あつ、こんなにすぐできるなんて思わなかった。すげー。俺って天才？」

「調子にのらないポン。」

「すごいわ。天才かどうかは分からないけど。でも、やっぱり、集中したり、興奮したりすると、目の色はもどつてしまうの。それに、影も見えなくなるでしょ？」

「あつ、本当だ。虚無きよむが見えない。」

走っている生徒に目をやるミコト。さっきまで誰にでもあった影（こころの虚無）が見えない。

「その目でも、虚無羅密たいに強い力の影を見ることが出来るけど、力がうまく使えないの。」

「そうなんだ。って、力？力って何？」

「そうね。いえ、あなた、本当に守り神さんから、何も聞いてないのね。それでよく学校へ来れたわね。怖くなかったの？」

「本当だよ。ポンポン。どうして教えてくれなかったんだ？」

「ポンポンもミコトの力なんて知らないポン。きつと、爺ちゃんな

「ら知ってると思うポンが…。」

「まあ、いいや。きっと、本当にポンポンは知らないんじゃない？人間だっていろいろあるだろ？」

「ええ。まあ、いいわ。結局のところ、あなたも私も虚無羅を浄化するのが目的よね。これからお互いに仲良くやりませんか？」

「もちろん。心強いよ。こちらこそよろしく。」

「私は1年B組にいるわ。あなたは。」

「俺は2年B組。同じB組なんだね。」

「そうね。10分の1の確率ね。」

第11話 く緑色の目の少女く（後書き）

新キャラクターの登場です。

彼女が出てきて、話の流れが大きく変わってきます。

ハラハラドキドキ系が多くなるかもしれません。

話の上でつじつまが合っていないところがあれば、教えてください。

筆者コーナー

「ブレイブストーリー」漫画も映画も見ました。小説は読んでません。><

漫画のほうがいいなと思います。

絵がきれいですね。

カバーはミユシヤを思わせます。

第12話　く時代遅れ？の二人く

未だに駐輪場で話をしている4人（内、二つは守護神）。

「よしつ。じゃあ、なにかあったら、…どうすればいい？携帯なんて、俺、持っていないんだけど。」

「そう。よかった。わたしも、持っていないわ。」

初めて少し顔を赤らめたセイラ。（おおつ、なんか嬉しい。最近の高校生って（俺もだけど…）ほとんど携帯持つてるからな。）

「まあ、いいや。何かあったら、直接クラスまで行くか、下駄箱にメモでも入れとくよ。」

「そうね。わたしもそうするわ。あと、これが、いちおう、わたしの家の電話番号。」

「えつ。ああ、じゃあ、俺もわたすよ。」

「いたずら電話しちゃだめよ。」

「へっ？？？」

「冗談。」

「あはは…」

すました顔で言うセイラに、あっけにとられているミコトとポンポン。

「そう、今、一番の問題は、すでに8時10分だということだ。」
気を取り直してミコトが言った。

「ええ。わたしも初めてよ。…ホームルームに遅刻するの。」

キン・コーン・カーン・コーン

「いそげー。」

無常にも始業のベルが無機質な音を奏でた。走りながらミコトが言う。

「いろいろ聞きたいことあるから、昼休み、屋上でどう？」

「えっ、ええと、目立たない？」

少し考えた様子でセイラが返した。

「じゃあ、…図書室は？」

「いいわ。」

「じゃあ、昼休み。」

「ええ。」

（なんか、デートの約束みたいだ。しかもセイラ、結構というか、かなり美人だし。…って、すぐこんなこと考えるのはおかしいよね。…。）

階段の入り口が2階は2・3年生、1階は1年生と別れていた。

階段を上っている途中、一瞬1年玄関を見たミコトだったが、すでにセイラは下駄箱から上靴を出しているところだった。ミコトも急いで上靴をはき、教室へ向かった。すでにホームルームは始まっている様子だ。（まいったなあ。なんて言おう？女の子と話してたなんて言えないなあ。）教室の後ろのドアをゆっくりと開けた。

「すいません。おくれました。」

「どうした神崎。めずらしい。そういえば、お前、調子は大丈夫か？」

（さすが尾崎。話が分かる。）

「大丈夫です。」

そういつて入ろうとしたとき、

「理由はどうした？」

（やっぱり聞くよね。）

「すいません。ちょっと調子が悪くて、寝坊してしまいました。以後、気をつけます。」

「そうか、座りなさい。」

謝罪と理由を言うことが、この学校の、いや、尾崎のルールであった。

（あれっ、シンジが欠席？どうしたんだろう？）

第12話　く時代遅れ？の二人く（後書き）

どうでしたか？アドバイスお願いします。

出来るだけ返事をしたいと思いますので、是非感想を聞かせてくださいね。

ちなみに、尾崎のイメージは「アヒルの空」（マガジン）というバスケ漫画の顧問らしき男の人をイメージしました。分かりにくい説明ですみません。

携帯電話は持っていないという設定にしました。たいした理由はありませんが、二人とも携帯を使うようなイメージではなかったので・・・あとは筆者の趣味ですね。

筆者コーナー

「のだめカンタービレ」も好きです。千秋の突っ込みが好きですね。ドラマはあまり見ていませんが。サークルKに置いてあったまたま手に取ったのが始まりです。

最初に読者の心をつかむって難しいですね。

最初が肝心ということ学びました。

第13話　く欠席の理由

第13話　く欠席の理由

山下サトミが自殺をしてから3日目。その間に色々なことがあった。色々という二文字では片付けられないような信じられない出来事だ。

まずは、サトミの机から声が聞こえたこと。きっと彼女が死ぬ前に経験したり思ったりしたことだろう。その声は悲しみにあふれていた。

そして、気を失った自分が保健室で見たものは、なんと自分の守り神というものだった。今考えれば、怪しい話だが、実際俺の目の色が光りを帯びた青色に変わってしまい、しかも人の心の影である「虚無」が視えるようになったのだから、信じないわけには行かないだろう。

そして、守り神は一人じゃないらしい。リスのようなふわふわした守り神、えーと、ポンテ・ポンタ…なんとかつていう（ちよつぴり頼りない）守り神だ。自分はポンポンと呼んでいる。そいつがいるいと俺に話しかけてくれる。まあ、守り神だっていうことはなんだかすごく納得がいく。こいつがそばにいますごく温かい気持ちになれる。

ポンポンの話だと、人には虚無があるけど、虚無の状態ならいいそうさ。しかし、それが強くなって形を作ると危ないらしい。虚無羅（むら）といって、憑いた人を自殺に追いやりたりするらしい。

自分はサトミの自殺もなんとなくそいつが絡んでいるように思えてならない。

そうそう、ついさっき緑色の目をしたかわいい1年生にもであった。名前はセイラ。山神セイラというそうさ。同じように虚無が見え、自分よりも少し詳しくいろいろ知っているらしい。まあ、それ

は守り神の違いによるものだと思うが……。目の色を黒く戻す方法もこの子が教えてくれた。

その守り神が、これまた神秘的な美しさを持ち妖精のような形をしていたリリイだ。まあ、妖精自体見たことが無いが、そう形容するのがふさわしいと思ってしまふ。

さて、本題はここから。自分はあまりにも虚無羅について知らないすぎる。虚無羅を浄化させるのが使命らしい。ただ、どうやって浄化させるかを知らない。それでどうやって虚無羅と戦えっというんだよっ！

「はあ。」

ミコトはため息をついた。（まあいつか。さっきのセイラっていう子に聞けば。）そうやって自分をなぐさめるミコトであった。

（そういえば、シンジはどうして今日いないんだろう？）

ミコトは何か胸騒ぎのようなものを感じていた。窓から見る景色はいつもと変わらない。（サトミは何を思っ自殺したんだろ。明るい子だったのに。いや、でも、確かにここ数週間は暗かったか。ちよつと言葉がきつかったり、一人でいることが多かったよな。やつぱり、あの時間いた声は、サトミの心の声だったのかな。人が一人自殺をしたっていうのに、本当に変わらないもんだな。自分が死んでも、……いや、そう思うのはよそう。）

「なあ、シンジの休んだ理由、知ってるか？」

「えー、知らない。熱じゃないの？」

「あいつ、サトミに告白されたんだって。なっ。」

「うん。サトミの友達が、そう言ってたわ。サトミがシンジ君と話してたと思ったら、泣いて帰ってきたんだって。」

（おいおい、それは違うぞ。あいつは振られたんだ。）

「それで気まずくなっ来れなかったのか。」

数人の生徒がこの話題で盛り上がった。なぜかミコトはその中に入って本当のことをわざわざ言う気にはなれなかった。
（でも、なんだろう？振られたシンジがどうして休んだ？何かまだあるのか？）

「わたし、事実を確認しようとしてシンジ君に電話したの。そして、」
「えっ、俺はそんなことしてない。」なんて答えたの。信じられないって言うてあげたわ。」

「おいおい、それは違う。シンジは本当に振られたんだ。」

ミコトが立ち上がり話しをしている集団に近寄っていった。

「えっ、ミコト君はどんなことを知ってるの？」

「どんなことって、とにかくあいつは振られたんだ。俺もサトミが自殺した後電話で直接聞いたんだよ。」

「あらっ、でも、うそかもしれないじゃない。自分が振ったなんていったら、原因にされちゃうものね。」

（机から聞こえた声のことを言うか？いや、言っても誰も信じないだろう。）

「いや、でも、俺はシンジを信じるね。それに、たとえ振ったとしても、それが自殺の原因というわけにはならないだろう。」

「まあ、そうだけど…。じゃあ、どうして休んだの？」

「それは、…本当に風邪ひいたんだろ。」

口から出た言葉とは裏腹に、ミコトは不思議な胸騒ぎを感じていた。

ミコトはまだ知る由が無かった。サトミを自殺においやったその影（虚無羅）^{きむら}が、今はシンジの体を棲家^{すみか}としていることは。

第13話　く欠席の理由く（後書き）

シンジに取り付く虚無羅がでてくるのは、もうかなり先のことです。次は、二人の図書館でのやり取りです。

変な呪文も出てきます。

よかったら覚えてください。

筆者コーナー

オン　コロコロ　く　は仏教の御真言です。仏を表す言葉ですが、この小説ではそういう意味は特にありません。興味のある方は仏教に関するホームページをあさってみてください。色々な逸話などがあって面白いですよ。閻魔様とお地藏様が兄弟だったり^^ちなみに、「仏ゾーン」の千手君が好きです。地藏君も好きです。阿修羅君も好きです。

第14話　二人だけの会話

ミコトは教室の時計を見た。もうすぐ昼休み。先ほどから時間が気になってしょうがなかった。山神セイラと図書室で会う約束をしているのだ。

（昼休み、何を話そう。聞きたいことは山ほどあるな…。まず、今朝会ったとかげの虚無羅きよむらをどうするか。どうやったら浄化できるのか。…あの子はどうして影がみえるようになったんだろう？少しきつそうなタイプだよな…。でも、かなりきれいだ。年下か、「神崎先輩」とか言ってくれるのかな？ああ、でも、さっきは「あなた」なんてよばれたな。旦那じゃないってのに、まったく。でも、かわいいよな。・・・）

「起立、礼。」

（よし、そろそろ行くか。）

図書室へ移動するミコト。頭には普通の生徒には見えないポンポン（ミコトの守り神）がのっている。昼休みになったばかりなのに、ご飯を食べていないのだろうか、5、6名の生徒がすでに図書室にはいた。奥に入っていくと、すでにセイラはテーブルの上にノートを開き座っていた。

「やあ。」

声をかけて隣に座るミコト。

「ええ。」

少し照れているのだろうか、顔を少し紅潮させながらそっけなく答えるセイラ。

「昼ご飯は食べたの？」

「まだよ。あなたは？」

「まだ。…そっか。じゃあ、さっと話しをして、ご飯食べなきゃね。」

（…しまった、早く会話を終わらせたいように聞こえちゃったかな

？)

「ええ。そうね。」

(ええ、そうねって…。やっぱ俺のことなんとも思っていないか…。まあ、今朝会ったばかりだもんな。そのほうが当たり前だ。)

「あのさ、今朝の3人組についていたトカゲ、まずはあれをどうするかだよな。」

「そうね。…まずは、あの虚無羅^{きむら}を本人から引き離さないといけないわ。」

「どうやって？」

「虚無羅が憑^よいている本人に触れて、祓詞^{はらいことば}を唱えるの。」

「祓詞？」

「ええ、きつとあなたも使うようになると思って、紙に書いてきたわ。少し長いわよ。」

先ほどのノートを定規できれいに切り取り、ミコトに見せるセイラ。

「もろもろの…まがごと… つみけ・がれあらんをば…、ん？なんて書いてあるんだ？」

「こういうのよ。‘もろもろのまがごと、つみ、けがれあらむをばはらえたまい きよめたまへと もうすことを きこしめせとかしこみかしこみ もうす’ いい？」

「うーん、これは、何度も練習がいりそうだな。」

「意味を覚えれば簡単よ。もろもろというのは、意味はそのままよ。色々なとか、そういう意味ね。まがごと、つみ、けがれがあったらお払いしてください。清めてください。そう言っているのよ。」

「そうなんだ。すごいね。…本当にそれで大丈夫？」

(ほんつと、こんなことぜんぜん知らなかったぞ。この子に会わなかったらどうしてたんだろ。…)

「ええ。きつと大丈夫よ。しっかりと念じてね。」

「この詞^{ことば}が通じれば、虚無羅^{きむら}は本人から離れて、きつと私たちを襲ってくることになるわ。」

「どうして？」

「この詞を唱えると、虚無羅は唱えた人がいなくなるという限り、1日10日ほどで浄化されるの。…浄化といっても虚無羅にとって死を意味するようなものだから必死だと思うわ。…」

「そっか。なんか、かわいそうだな。というか、相手もこつちを殺す気で襲ってくるよな…。逃げ切らないとだめってことか。」

（はは…しゃれになってないじゃん。まあ、あのくらいのトカゲなら大丈夫だと思うけど…。火ふいたりしないよな？）

「あとね、浄化期間を待たなくても浄化できる方法があるの。」

「どんな？」

「さっきと同じことを虚無羅相手にするの。虚無羅に触れながら、被い詞'を唱えるの。3回ね。」

「そうなんだ。その方が相手に追われるよりも気は楽かも。」

「そうね。でも、逃げたほうが安全の場合も多いと思うわ。ただ、注意しないといけないのは、虚無羅は物体を通り抜けることが出来るの。だから、家の鍵を閉めても無駄よ。」

「へえ。…それは、きびしいね。…じゃあ、ますます被い詞を唱えるしかないな。」

「でも、虚無羅にも物理的な力が働くものがあるの。簡単に言うと、霊的な力が宿っているものよ。もちろん、霊って言っても死んだ人がなったりする霊じゃないわ。精霊の力、自然界が生み出す目には見えない力の源のことよ。自然界の植物などには、少なからずそういう力が宿っているわ。リリイが言うには、マナっていうらしいの。つまり、私たちが虚無羅に触ることが出来るのも、半分はマナの力を得てるってことなのかも知れないわ。いえ、マナの力が強まったというべきかしら。」

「セイラ、本当によく知ってるね。」

「リリイが教えくれたから。」

「うちのポンポンもいいやつなんだけど…。」

「ごめんポン」

「気にしない気にしない。」

「そうですね。守り神にもいろいろな役割があると聞いたことがありますわ。」

リリィにそう言われ、少しほっとしたポンポンであった。

第14話　～二人だけの会話～（後書き）

説明的な会話文が長くてすみません。

マナのエネルギーが、この世界のキーワードの一つですね。

まだまだ話は続きます。

寛大な心で見えてやってください。

筆者コーナー

「ああつ、女神様」って、もう20周年を迎えるんですね。本当にすごいです。名作ですね。アニメもなかなかよくできています。「OPEN YOUR MIND」の歌が牧歌的な響きで好きです。

皆さんの好きな歌や漫画は何ですか？良かったら感想に付け加えてくださると嬉しいです^^今の読者数ならかなり返信できると思うのでよろしく願いします。

第15話　く踏み出した一歩

図書室でのミコトとセイラの話は続いていた。

「なんか、虚無羅きよらの浄化の方法がわかっただけでも、かなり胸のつかえがとれたよ。ありがとう。」

「い、いいえ。わたしは知っていることを話したただだから。」

セイラの表情が少し照れているようにも見えた。

「あのさ、セイラってよんでいいかな？」

「…どうして？ええ、もちろんいいわ。…あなたのこと、なんて呼べばいいかしら？」

「うーん、まあ、普通は神崎先輩とかだろうと思うけど、そうだな、これから二人で鬼退治と決めこんだことだし、ミコトって呼びなよ。」

「…ミコト…ええ。分かったわ。」

「それじゃ、あのことは、被はい詞ごいし、覚えておくよ。今日の帰りにでもあの3匹を捕まえようか？」

「…そうね。いえ、無理をしないようにしましょう。私もそれほど経験があるわけではないの。できれば一体ずつがいいわ。」

「じゃあ、部活が終わったら、もう一度会える？」

「部活？あなた、…ええと、ミコトは部活に入っているの？」

「ああ。親父がうるさくて。剣道部。これでも次期主将って言われているんだぜ。大会も近いしな。」

「そう…。」

「どうしたの？」

「いえ、わたし、部活に入っていないの。授業後の部活の時間が主に虚無羅に対する活動時間だったから。」

「…そうか。そうだな。…」

（どうする？剣道をやめる？）

（やめられるか？）

（今、やめないと・・・）

「そうだな。もう、悠長に部活はやってられないか。なんてったって、自分にしか出来ない‘使命’だからな。」

気になることはあった。部活の仲間。シンジもその一人だ。しかし、いつまでも部活をやっていることは出来ないだろう。この先、本当に高校生として過ごせるのかすら、ミコトは不安に思っていた。

「先生、ありがとうございました。…やめる理由ですか？今は、まだ何も言えません。」

「…そうか。残念だ。」

まっすぐに剣道部の顧問を見つめるミコト。ただし、剣道部顧問といっても、剣道をやっていたわけではない。たまに来て見ているというくらいだ。顧問の先生もミコトの目を見て、これ以上何をいつでも無駄だということを理解したのだろう。

（そうか、ここではもう練習はできないんだよな。）放課後、武道場に立ち寄ったミコトは、感傷に浸っていた。ふとミコトの目に一筋の雫が流れた。武道場に一礼をした。静寂がミコトをつつむ。涙があふれてきた。制服の袖で涙をぬぐい、武道場を後に、ミコトはセイラの待つ、1年B組にむかった。

第15話　く踏み出した一歩く（後書き）

剣道部だったんですね。

部活に入っているのが一般的だと思います、入らせました。

やめる決断力。筆者が話の都合上、掛け持ちは無理だということ
で即決めました。

ちなみに筆者もスポーツは好きだし、スポーツ系の漫画も好きです。
マガジンのバトミントン漫画や、「オーバードライブ」という自
転車漫画も好きです。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます。子供から
大人まで幅広く読んでいただけたらと思います。これからもどうか
応援お願いします。

是非感想をお寄せください。できる限り返信いたします。

第16話　く使命の重み

「本当に部活やめてよかったの？」

「ああ。大丈夫。やらなきゃいけないことがあるだろ。うちらには。」

「そうね……。」

少しうつむいて、わずかだがこちらに笑顔を向けた。慈しみに似たその表情は、ミコトの胸を高鳴らせるのに十分であった。使命の重さを肌で感じているミコトであったが、躊躇ちゅうちう無く退部してきたことは、やはりセイラの影響も大きかったのだらう。

二人はさっそく行動を開始した。

「初めてつていうのは、どきどきするな……。」

「安心して。わたしもどきどきしてるから。」

そう言って歩き出すセイラ。肩を並べて歩くミコト。遠くから見れば二人は付き合っているようにしか見えないだらう。向かう先には今朝の不良3人グループの中の一人がいた。

「今日はあの子の影をやりましょう。きっと、二人なら大丈夫よ。」

「だいいいね。……虚無羅きむろは、こっちが近づいたときに襲襲ってきたりはしないのか？」

「するかも知れないわ。……わたしが、虚無羅を本人からひき離はなすから、あなたはあの人に触れて被詞きしを唱うたえてくれる？」

「ああ。分かった。」（とはいっても、だいじょうぶか？）

「もろもろのまがごと、つみ、けがれあらむをば　はらえたまい
きよめたまへと　もうすことを　きこしめせと　かしこみかしこみ　もうす、でいいよな？」

「ええ、よく覚えたわ。」

「必死だからな。」（そう。必死だけど、少しわくわくしている。なぜだ？本当は怖いはずなのに。）

「気をつけるポン」

ポンポンが話に入ってきた。守り神達は二人が話しているときはよほどのことが無い限り話に参加をしない。（「ポンポンは守り神ポン。本当は人間同士で話をするのが一番ポン。」って言ってたな。よっぽど心配なんだろう。なんせ俺の初仕事だから。）

「ああ。ありがとう。」

「ちゃんとポンポンも守ってあげなきゃだめよ。」

「えっ、ポンポンも襲われるの？」

「ええ。そういうこともありえるわ。」

「なんだか大変そうなお仕事になりそうだ。」

そうするうちに人通りの少ない神社の近くまで来た。

「ここで勝負をしましょう。」

「そうだな。ここでなら少しくらい怪しい動きをしても大丈夫そうだな。」

「うふっ。そうね。頼りにしてるわよ。私が影を引き離すのはだいたい1分間よ。後はしっかりお願いね。」

そういうとセイラは走って前の不良生徒に近づいた。近くで囁く。
「オン コロコロ マカリシエイ ソワカ。オン コロコロ マカリシエイ ソワカ。」

何かの呪文だろうか。トカゲ虚無羅きよむらにすぐに変化がおとずれた。

第16話 く使命の重みく（後書き）

いよいよバトルモードになってきました。

制約の多い戦いで、非常に書きづらいですが、

自分が決めたことなので頑張ります。

筆者コーナー

小説を読むの中では、「厄神様はかくかたりき」が好きですね。読者数は圧倒的に違いますが。コメディーって言うジャンルもいいなあと思いました。ちなみに、この小説のジャンルがファンタジーっていうのもいいのかどうか分かりません。（違うよね・・・。）

次回もどうぞ見てやってください。

第17話　く初仕事く

セイラがトカゲ虚無羅きよむらの近くでなにか不思議な詞を唱えると、その黒く禍々（まがまが）しい物体は鋭い眼光でセイラをにらみつけた。まるで目の前の餌をとられた獣のように、セイラに向かって走り出した。遠くから見えたおよそ小さな虚無羅きよむらであるが、幾分か実態が大きくなっているようにも見える。駅のほうへ向かう不良男とは別に、セイラはひっそりとたたずむ神社のほうへと駆け込んでいった。それを追っていく黒いトカゲ。体長は50cmほどだろうか。頭には目が三つあり角のようなものが3本生えている。アンコウのように大きな口に鋭い牙。（おいおい、あんなのだったか？聞かないぞ…。）うつすら冷や汗が流れるのを感じた。

「ミコト、お願い。」

一瞬、何をすればよいか忘れてしまいそうだった。あのトカゲの様子に少し引いてしまった自分がいる。（ちっ、だてに幽　白書は読んでないって。）

黒い影は細い糸のようなものを本人に残している。（きっとこいつがまだトカゲが不良生徒に憑いている証拠だな。）

「ええいつ」

そう言つて、走りこんだミコトは前にいた不良生徒に両腕を回して抱え込んだ。ただ、その様子は後ろから抱きつきに行ったようにしか見えない。

「なっ、なんだお前っ！」

滅茶苦茶におどろいている不良生徒は、あたりまえだがミコトを振り払おうとする。

「気持ち悪いんだよっ！」

相手も必死だ。全力で振り払おうとする。

「もろもろのまがごと、つみ、けがれあらむをば　はらえたまい

きよめたまへと もうすことを きこしめせと かしこみかしこみ もうす、」

次の瞬間、男とトカゲを結んでいた黒い糸は一瞬光り、パツと消えた。スマートな方法ではなかったが、ミコトの選んだ抱きつくという方法は、相手に触れながら被詞はいつこいばを言わなければいけない」という条件の下では案外有効であつた。もし一瞬でも離れてしまえば、その詞は力を無くしてしまうのである。

（よし、次はトカゲの浄化だ。）

「なんだよてめえは！」

「がこつ」と鈍い音がした。顔面をなぐられたのだ。（しまった、気を抜いた。）鼻が熱くなり、血がたれている。

「つきしょー、お前のためなだつつうのに。」

悔しさ紛れに相手の腹にけりをいれ、口を押さえてミコトも神社へと駆け込んだ。

（くつ、あいつ、追ってくるか？）

運のいいことに、蹴られざまに倒れこんでしまった不良生徒は、ふだんなら追つてやり返さないと収まらない怒りの矛先をなんとか収め、いつもは感じられないすがすがしさに不思議を覚えていた。追う気にならなかったのだ。

「ちっ、いきなり仕掛けてきたのはてめえだろ。」

そう言うと、すつと立って駅のほうへ向かっていった。

「なんでだろう？ 今までの重苦しい気持ちがどっかへ行ったみたいだ。」

第17話 〈初仕事〉（後書き）

次はセイラの力です。

個人的には、これからが面白いと勝手に思っています。
どうぞ。

筆者コーナー

好きな漫画というより、どうしても続きが気になってしまつのは、
富樫氏の「ゆうゆうはくしよ」とか、「はんたーはんたー」とかで
すね。

個人的には、残酷な描写はどうかと思うときもありますが、あの
思考や世界観やキャラクターの魅力はすごいですよね。

第18話　～セイラのカ～

（セイラは大丈夫か？）気に留めていたことは二つあった。一つは影（虚無羅）を本人から引き離さないまま浄化すると、本人は死んでしまうということ。だからセイラはただ逃げることしか許されない。そしてもう一つは、影は祓詞はらいことばを唱えた者がいなくなる限り、一定の期間が過ぎると浄化されてしまうということだ。つまり、祓詞を唱えた者を狙ってくるということになる。（つまり、次は狙いがセイラから俺になるってことだよな。大丈夫かよ。）

そんなことを思いつつも、周囲を警戒しながら古びた神社へと足を運んだ。

ふと頭の中で不安がよぎった。（トカゲがあんなにでかくなると思っても見なかったぞ。犬くらいの大きさか…。噛まれたら痛いじやすまなそうだな。セイラは大丈夫なのか。）

ミコトは、鼻血を押さえながら走ることが、こんなにもしんどいものだと初めて痛感していた。（漫画の主人公のようにはいかないか…。）

神社には人影が無く、少し奥の林にはセイラがいた。

セイラの様子が普段とは少し違うことにすぐに気がついた。目は緑色に輝き、体から緑色のオーラが出ている。そばにいるはずのリリイも見当たらない。そして、おそらくあれがトカゲの影であろうものが見えた。おそらくといったのは、ミコトが見た影くらいの大きさの木のつるの塊かたまりが、セイラの前でわずかばかり動いているのだ。右手を前に突き出したセイラは、まるで木のつるを操っているようだ。

「オン　コロコロ　マカリシエイ　ソワカ。汝よ　我に力を与えたまえ。」

次の瞬間、虚無羅きよむらを捕らえていたつるが蛇が獲物を捕獲するとき

のようにきつくしまりだした。

「きゅえええ」というような爬虫類が叫んだらこのような音を出すのではないかという断末魔に似たような声が林中に響き渡った。顔を歪めているセイラの左手が震えながら握りしめられた。それと同時に木のつるはもうこれ以上しまらないといったところまでしまり、同じくはじける音と共にしなだれて地面に落ちた。

救いであつたのはその後に飛び散ったのが血や内臓といった類ではなく、黒い色をした液体だったということだ。

その場で生唾を飲んでたたずむミコト。その黒い液体も、だんだんと色がかすれ、薄くなり、しばらくして見えなくなってしまった。

「…見てた、の？」

「ああ。・・・ちよつと話が違うね。」

「…ええ。ごめんなさい。こんなに狂暴だとは思わなかったの。」

「そう…か。」

第18話 くセイラのかゝ（後書き）

セイラの仕事だけで終わりました。

植物を操るという力がセイラにはあります。

戦う場所が限られてしまうのが難点です。

次はミコトが力に目覚めます。ベタベタな展開ですみません。

よろしかったら感想をお願いします。こんな風にストーリーが進む
といいなという意見などもお待ちしております。

筆者コーナー

「ゆうゆうはくしよ」の4人中で誰が好きかといわれれば、やはり
リクلامですね。

好きなキャラは強くあってほしいと思うのは筆者だけでしょうか？

第19話　く戦いの後く

緊張していた肩の力が少し抜けたことは裏腹に、衝撃的な映像をみたミコトは自分を落ち着かせようと頭の中を整理することにした。

「今の、さっきのトカゲだよな？」

「…ええ。そうよ。」

「あれが、浄化？」

「…ええ。そうね。」

「…ああ。そうか、やったな。とにかく、浄化できて。」

自分の口からでた言葉とは別に、何か心から喜べないものをミコトは感じていた。

「…本当は、虚無羅きむらの浄化の仕方として、もう一つ方法があったの。虚無羅の核を壊すこと。」

「…そうか。まあ、そんなところだとは、思ったよ。」

「さっきの、…力を緩めたりしたら、きつと虚無羅はミコトを襲ってたと思う。」

「ああ。そうか。」

「…ごめんなさい。」

「…いや、あやまるなよ。…漫画とかじゃ、よくある話だ。（たしかに、一瞬、虚無羅に同情した。でも、もしかしたら、あいつに食われていたのは、自分かもしれないんだ…。）」

「お礼をいわなきゃな。ありがとう。」

「…いいえ。そんなことないわ。私も、あまり好きじゃないの。」

「だよな。…おれ、じいちゃんに言われたことがあるんだ。『今の人間は、この牛や豚や鶏がどうやって食卓に運ばれているか知りやあせん。牛や豚だって泣きながら殺される。この命は、人間に食べられるために生まれてきたんじゃない。人間はおごっちゃいかん。命をもらっちよるということを知らにやいかん』って。きつ

と、それと似たような感じだよな。」

「……？そうね。」

セイラはなんとなく分かったような分からないような曖昧な返事を返した。

（うーん、例えが悪かったか。）

「あのさ、さっきのが、セイラの力ってやつ？」

「ええ。そうよ。」

「すごいんだな。木を操れるんだ。」

「ええ。ここには、ちょうどいい木がたくさんあるから。」

「それって、やっぱり自分のカラーに関係するの？」

「そうみたいね。私の場合は、森だから、こういう力が使えるみたい。」

セイラの体が緑色の光に包まれ、リリイが出てきた。

「やあ。」

気軽に話しかけるミコト。

「こんにちは。リリイです。」

「こんにちは……。」

「私から、少し説明いたしますね。」

第19話　く戦いの後く（後書き）

人はきつと何かに守られて生きているはず。

夜、眠りに着く前、一日の出来事を思い出し、それに感謝の詞を思い浮かべてみてください。

きつと体は温かいものに包まれ、

守り神の存在が感じられるはずです。

くなんて後書きもたまにはいいじゃないですかへへく

筆者コーナー

「スチームボーイ」というアニメ映画を見ましたが、映像がきれいで良かったです。

話の構成も案外しつかりとしていて好きでした。ロボットとかメカを作る人にあこがれますね。

第20話 くミコトの力(1)

「私はセイラさんと同化することによって、私の力が少しですが使えるようになるのです。」

リリイがセイラの使っていた力についての説明をしてくれている。「そっか。じゃあ、自分はポンポンと同化すれば何らかの力が使えるんだね。」

「そういうことですね。」

「…知らなかったポン。(ウェーン)」

「…大丈夫だから、そんなに落ち込むなって。」

「大丈夫よ。」

「ウウ…最近こればかりポン。」

「そうだ。ポンポンはどんなことができるの?」

「ポンポンは、…飛んだり、はねたり。」

「すげー。飛べるの?」

「さっそく、試してみたら?」

(やば、すっごいどきどきしてきた。)

「ポンポン。頼むぞ。」

「OKポン。」

ポンポンは静かにミコトの中に入っていった。ミコトの体が空色に輝く。

「これでいいのか?なんか、あんまり飛べるって実感はわからないけど。」

「ええ。そのままだと無理よ。」

「どうして?」

「契約の詞を唱えるの。」

「呪文多いね。」

「そうですね。」

リリイが登場して言った。

「きつと、あなた方の場合は、‘オン コロコロ ブラフマー ソワカ’と唱えるのではないでしょうか。」

「えっ。そうなの？わたしの場合、‘オン コロコロ マカリシエ イ ソワカ’よ。不思議ね。」

「そうでもないですわ。力の源がどこに属しているか。お願いの先が違っただけですわ。」

「さすが、物知りだね。」

「じゃあ、いくよ。‘オン コロコロ ブラフマー ソワカ’」

ミコトの体が青色に強く輝き、その瞳は一層強い青い光を放つのだった。

「すごい。力が漲^{みなぎ}ってくるようだ。」

「気をつけてね。あまり長い状態でいると二人とも疲れてしまうわ。」

「わかった。…風を感じる。ちよつと、飛んでみる。」

不思議に、ミコトには飛べる感じがしていた。足に今まで感じたことの無いような力を感じると、浮いたように軽い体。また、風の気持ちができるように心にしみこんでくるのだ。

「エイッ」

軽く地面を蹴ってみる。それだけでも3メートルほど浮いただろうか。神社の屋根瓦を見下ろした。(すげー。めっちゃ感動してる体が震えてる。ポンポン、すごいぞ。きつと月を歩いていたらこんな感じになるのかな。)静かに体が重力を感じ降下していった。

「よかったですね。すごい似合ってますよ。」

リリイが笑顔で囁いた。

「ありがとう。なんかすげー嬉しいよ。」

「よかったわね。私も、うらやましいわ。」

「そんな。セイラやリリイのもすげーって。」

「ええ。私も、この力、大好きよ。」

「そっか、きつと、自分とずっと一緒だったから、しっくりくるん

だよな。」

「そうかもしれないわね。…ええ、きっとそうだね。」

心に満ち溢れている充足感を感じていたが、一抹の不安を覚えた。
「でも、どうやってこれで戦えばいいんだろ？」

第20話　くミコトの力(1)く(後書き)

嫌なことがあったとき

そんな時にでも

寝る前に

少しでもあったいいことに

感謝できる人ほど

心の強い人はいない。

信じてほしい。

あなたを守っている者がいることを・・・

く再びこんな感じの後書きです。く

筆者コーナー

ガンダムシリーズで何が好きですか？と言われたら、おそらく「W
ING」と答えます。

第一話のヒイロの台詞。「お前を殺す」と、その後に流れる音楽に
心を奪われたのを覚えています。

第21話　ミコトの力(2)

ミコトの体が一瞬身にまとう光を強めた。

「風を集めてみたらどうかかなポン」

「ポンポン、いるのか。」

「うん。どうやらポンの意識もちゃんとあるみたいだポン。右手に意識を集中してみるポン。」

「OK。風を集めるんだよな。こうか？」

「つかもうとしてもだめポン。」

「何やってるの？」

不思議な動きをするミコトにセイラがつっこんだ。

「ああ、頭の中でポンポンと会話してる。」

「なんだ。よかった。」

右手にもう一度意識を集中させるミコト。次第に風が集まってく
る感覚を覚えた。(右手が温かい。風のもつエネルギーを感じる。)
それは手の平の上で回転を始めた。

「すごい。私の目にもしつかりと見えるわ。」

こぶし大の風の塊はすでに砂や埃(ほこり)をまとい、普通の肉眼でも確認
できるような状態になっていた。

「先ほどの詞(ことば)をもう一回唱(な)えると、力がぐうんとあがりますわ。」

「ミコト。その詞を唱えながら的にめがけてぶつけてみるポン。」

「よし。オン　コロコロ　…　ブラフマン　ソワカー」

ミコトの体はまばゆい輝きを放ち、風の塊を5mほど先の的にめ
がけて投げつけるミコト。風の塊はまるで荒れ狂う龍のように、的
としていた木にめがけて飛んでいった。

バキバキバキッという音と共に、相撲取りの周囲くらいあるよう
な巨木に、同じくその横周りくらいの穴が開いた。

「うわああ」

思わぬ激痛にその場に倒れるミコト。はじき出されるように出た

ポンポン。運の悪いことにちょうどミコトの方向へ先ほど穴を開けた巨木が倒れこんできた。

（か…体が動かない…。やばいつ。）

「オン コロコロ マカリシエイ ソワカ」

倒れてくる木があと少しでミコトの顔にぶつかってしまおうという瞬間に、木が二つに割れ、ミコトを裂けるように倒れた。」

ドシンと倒れた木の上にはセイラが座っていた。

「もう、はらはらさせて。それに、木をむやみに倒しちゃだめよ。」

「ああ。ごめん。」

先ほどとまっていた鼻血が、ちょうど木が鼻に当たっていたのか、再びスーッと流れ出てきた。

木は何かに命を与えられたかのようにもとの木の状態へともどっていった。

第21話　ミコトの力（2）（後書き）

ミコトの力、いいですよ。

別に「なる」の「らせんが」のパクリとか言わないでくださいね。

別に忍者じゃないので勘弁してください。どうしても、自然の力をベースにすると発想が似てしまうんですよ。

後、関係ないことですが、日本は自然の豊かな国なのか、アニメズムや神性が高いよなあと思えます。

筆者コーナー

ガンダムシリーズで、今連載中のアスナが主役のZガンダム時代のウェーゴとティターンズの構想を描いた漫画も好きです。

アスナがだんだんたくましくなっていくますが、お惚け天然キャラの方が筆者的には好きでした。

第22話　く戦いの後のひと時

虚無羅きむらとの戦いを終え、ミコトの‘力’を確認した後、二人は学校へともどることにした。

「鼻血だいじょうぶ？」

「ああ。今日は色々ありがとう…。初めてづくしだったから。でも、なんか、これで自分も本当に虚無羅と対峙出来るかなって、ようやく少し自信がわいてきたよ。」

「ウフツ。無理しないようにね。」

いつまでも戻りたくないという感情がミコトにはあった。もしかしたら、山神セイラにもそういう気持ちがあったのかもしれない。

神城高校は丘の上の少し高い場所に位置している。神社を離れ高校へともどる二人は、灯りのともり始めた町並みを見下ろすことのできる、神高生の自慢の一つである絶景ポイントを歩いていた。
(彼女いない暦16年間の俺だけど、これは…なんてラッキーなシチュエーションなんだ。)

神崎ミコトはあまりにも神秘的でロマンチックな情景と、先ほどの興奮も合わさって、今までに無い高揚感を覚えていた。

「セイラ…」

何も考えずに出た言葉だった。ただ、この時間、少しでもセイラと話していたいという思いがあったのだろうか。

「えっ、何？」

曇りの無い瞳でミコトを見つめるセイラ。それをじっと見つめるミコト。

「プツ。」

いきなり笑い出したセイラ。

「…ごめんなさい。ミコトが、その顔であんまり真剣に見るから…。」

「その顔?…あつ。」

ミコトは自分の鼻にティッシュがくるめて入れてあることを思い出し、さらに顔を真っ赤にさせた。（やばっ、かつこわる。）ふとセイラの方を覗く。今まで見たことの無いような笑い顔を見せている。

「よかった。セイラって、笑うとすげーかわいいね。」

自分でもそんなことをすらっと言ってしまうことが不思議でしやうがなかった。いや、男が10人いれば、10人ともそういったであろっ台詞かもしれない。

「えっ。」

不意をつかれたセイラも顔を赤く染めて俯うつむいた。

第22話 く戦いの後のひと時（後書き）

こついう話もありかなと思い、作ってみました。

ミコトとセイラの関係はどうなるんでしょうか？

筆者にも分かりません。ちなみに、二人とも奥手という設定です。いつまでたっても進展せず腹立たしくなっても、どうぞご愛嬌を。

筆者コーナー

奥手といえば森里恵一ですね。でも、それがいいと個人的には思っています。

ちなみに、「ああっ女神様」の話です。

第23話　夕刻の戦い

「きゃあゝ。」

学校へ着いた二人が真つ先に聞いたものは、女子生徒の悲鳴であった。もうすでにほとんどの生徒がそれぞれの家へ帰っている時間だ。こんな時間までいるのは生徒会の実行委員か、よほど部活の好きな連中か、もしくは学校の隅でたむろしている不良たちだ。

「どうしたんだ。」

女子生徒は二人。肩を並べておびえながら走っていく。その先には二人の男子生徒がいる。暗闇でよく見えなかったが、明らかに異変を視てとることができた。その二人は黒い影で覆われている。

「やばいわね。」

セイラの顔つきが変わる。

「どういうこと?」

「虚無羅^{きむら}が人の心を支配しているの。」

確かに二人はまるであぶない薬の中毒者のようによだれをたらし、目がどこを向いているか分からない状態だ。先ほどの女子生徒はきつとこの二人の姿を見て悲鳴をあげたに違いない。虚無羅に心と体を奪われた生徒は、こちらの存在に気がついた様子だ。初めはゆっくりと体を動かし、その次に走る姿勢となりセイラとミコトをめがけてくる。

「とにかく、テニスコートのあるところまで逃げましょう。」

「OK」

体の痛みはまだ取れていない。しかし走れるくらいにはなっていた。グラウンドを通り越し、さらにサッカー場を過ぎたところにテニスコートがあった。学校でも一番人目につきにくい場所だ。この時間なら誰もいない。

逃げている間にもセイラはリリイと、ミコトはポンポンと同化をしていた。

「オン コロコロ マカリシエイ ソワカ。」「オン コロコロ
ブラフマー ソワカ。」

ミコトとセイラは追ってきた不良生徒二人と退治した。

「で、どうすればいい？」

「さっきと同じようにするしかないわ。体に触れて被詞を唱えるの。」

「わかった。」

ミコトの動きはポンポンと同化したことで数倍早くなっていた。

（体が風のようなのだ。）

地面を蹴りながらあつという間に不良の一方にふれる。髪が長く茶色に染め上げ、右の耳にはピアスをつけている方だ。その横にはニットボウを深くかぶり金のネックレスしているやつがいる。ただし二人とも本人の意識は無いことが良く分かる。よだれをたらし、まるで薬中の男のようだった。

（何だこれは。）

ピアスの男に触ったミコトは一瞬で違和感を覚えた。皮膚が妙に硬い。次の瞬間、左腕に鋭い痛みを覚えた。まるで鋭いつめで引つかれたような傷跡が二本、その腕には付けられていた。

「くっくっ。」

痛みをこらえ、ニット帽の男の腹に少し強めにけりを入れた。ニット帽の男は5mほど先に倒れこむ。そのとき、コートを囲むように植えられているイチヨウの木がゆっくりと伸び、ニット帽の男の足と手を絡めた。その隙にセイラはニット帽の男にふれ、被詞を唱えた。

「もろもろのまがごと、つみ、けがれあらば はらえたまい きよめたまへと もうすことを きこしめせと かしこみかしこみ もうす。」

ミコトも握っている手を離さず、ピアスの男のあごに掌底を食らわせ、そのまま相手を倒し、腕の関節を決め相手が起き上がれないようにしているはずだった。

しかし、ボキツと鈍い音を響かせ。ピアスの男は自分の腕を省みず体を擦^よじらせてきた。腕を折った感覚に罪悪感を覚えたため、ミコトの反応が若干遅れてしまった。

ピアスの男は折れていない腕でミコトの横っ腹を殴る。ドフツという鈍い音と共に、ミコトはその場に嘔吐した。

（なるつ。）ミコトはその場を蹴って今度は10mほど高い位置まで跳んだ。相手はどうやら飛べないようだ。しかし、しばらくすれば地上へ戻ってしまう。ミコトは風の力をその右手に宿した。

「気をつけて。」

すかさず状況に気付いたセイラが声をかけた。

「大丈夫。手加減する。」

そう。手加減をしなければならぬ。相手は生身の人間なのだから。ただ、非常に硬いその体から、生身というだけでは表せない何かを感じていた。

第23話 夕刻の戦い（後書き）

ミコトが跳べるって便利ですね。

風は攻撃専用の力なので、ちよつと強めの設定です。

そのうち飛べる虚無羅も登場予定です。

戦いもいよいよ佳境です。続きも是非見てください。

筆者コーナー

むかし「マインドアサシン」という漫画がありました。が、知っていますか？

かずはじめ氏の作品です。主人公がクールでかっこよくて、ちょっと医者にもあこがれました。いまでも何かの作品を手がけていると思います。

第24話　トカゲ虚無羅との戦い

ミコトの右手に風の塊ができた。

ミコトは不思議に空気を蹴るといふ仕草を学び取っていた。空気の壁を右足で蹴って自分が落ちていく方向へ力を加えた。ミコトの向かう先は、ピアスをつけている男だ。その男もミコトを迎え撃とうとしている。ピアスの男の捕まえに来た右腕をはらいのけ、ミコトは男の胸に風の塊をぶつけた。男はその場で2回転ほどしてテニスコートの中央付近へと飛ばされた。そこへ急いで駆けつけ、今度は両腕を取りうつぶせにした。

ミコトの腹の辺りに激痛が走る。うまく言葉が出ない。

「もろもろの…ま、がごと、つみ、けがれあらば…。はらえたまいきよめたまへと　もうすことを　きこしめせと…　かしこみ…かしこみ　もうす。」

（やっと、言えたぜ。くそつ、あばら骨おれてねえか。）

次の瞬間、ニットの男とピアスの男からは、先ほどの不良と同じような3つ目のトカゲの虚無羅きむらができた。

明らかにこちらを向いて狙っている。（くそつ、まだ終わりじゃないのかよ。どう考えても、あのトカゲを押さえつけて、被詞を3回唱えるっていうのはきついよな。）

次の瞬間、2体のトカゲはお互いが呼び合うかのように体を合体させ始めた。一瞬の出来事にセイラもミコトも啞然としてしまった。「しまった。」

何がしまったのか、確信を持ってない二人であったが、その予想は不運にも的中していた。格段にその禍々しさは強くなっている。おそらく、2体にかけた被詞の力はなくなっていないだろう。この力が働けば、術者（この場合ミコトとセイラ）が倒れない限り、この虚無羅に残された命は、長くても10日程度なのだから。しかし、10日というのは、飛行機に乗って海外まで行かなければ不安に感

じる長さだ。

トカゲは人と同じほどの大きさになり、先ほどまで4つ足で立っていたものがいつの間にか2本足で立っている。口を大きく開け、鋭い歯でこちらを見ると、キュアアアと耳を劈くような大きな声で威嚇してきた。手にも鋭い爪が伸びている。

ミコトの後ろからセイラの力であやつられた銀杏の木のつるが、虚無羅をめがけて鋭く伸びていった。その木のつるを鋭いつめで難なく切り落とす虚無羅。しかし虚無羅の足にもう一本のつるが絡みついた。しかしそのつるも尻尾で叩き落とし、鋭い歯で噛み砕いてしまった。セイラを視界に止めたトカゲ虚無羅は、その方向へと4つ足で這っていった。トカゲが人の大きさで這うというのが、どんなに速いかこのときセイラとミコトは直々と思い知らされるのであった。

セイラが不意にとられていると、大きな口がすぐそこまで迫っていた。その口はすばやくセイラの腹に噛み付いた。

「セイラー！」

バリバリと噛み砕く音が聞こえる。あまりにも悲惨な情景を、一瞬目を背けてしまったミコトはその脳裏に描くのだった。

「うわああ。」

叫ぶと同時に勢いよくトカゲ虚無羅に飛び込むミコト。その手にはすでに風の塊が作られていた。

「オン コロコロ ブラフマー ソワカー！」

ミコトの叫びと共に、神社で放った2倍ほどあるかと思われる風の龍が虚無羅の体を啜え、天高く舞い上がった。

「ぐわああああ。」

あまりの激痛にミコトの意識はそこで途切れてしまった。

第24話　トカゲ虚無羅との戦い（後書き）

セ、セイラー!!

トカゲ虚無羅との戦いが一気に蹴りがついてしまいました。

まあ、いいです。

セイラも・・・

次回をお楽しみに。

筆者コーナー

野球漫画ってはずれが少ないですね。満喫に行ってなんかないかなと手にする野球漫画は、どれもたいてい読むことができます。この前は「ラストイニング」を読みました。

すごくいいってわけではないけど、悪くありません。

野球漫画では、最近でてきた「巨人の星」（マガジン）が面白いと思います。

第25話　く決着の後く（前書き）

前話はセイラの安否が気にかかったと思います。
さあ、どうなっているでしょうか。
では、25話、どうぞ。

第25話　く決着の後く

どこだ、ここは？

バリバリバリバリ

ひどく鈍く嫌な音が聞こえる。

「やめろー。」

どうあがいても、起きることのできない自分の体から、涙が溢れ出してくるのが分かった。

倒れた自分の横では、トカゲに食べられてしまうセイラの姿が無残に横たわっていた。

「うわああああああ…。」

はっと目を開き、悪夢から覚めたミコトは体中から汗がにじみ出していた。

「う…。」

体中が痛い。

「大丈夫？」

その一言によって目を覚ました少年は自分の目を疑った。

「セイ…ラ？」

「ええ。そうよ。」

「つつ、ここは？」

周りを見ると木に囲まれていて何一つ分らない。分かることといえ、この柔らかな感触だけだ。そう、夢か現か^{うつ}セイラに膝枕をされているのだ。

（天国か・・・）

真剣にそう思うミコトであった。（天国でもいいから、もう少しこの状態でいたい。）

不思議と涙が頬を伝ってセイラの腿に^{もも}たれた。あまりの緊張と悪夢から、いきなり天国にいるような感覚に陥ったのだ。無理は無いだろう。

（あーあ、泣いちゃってるよ。現実だとしても、かつこわるくてセイラを見れないな。あと、ちょっと、ここを動きたくないし・・・。）
あまりの疲れから、そのまま深い眠りに落ちるミコトであった。

それからどれほど時間がたったであろうか。いや、それほど時間はたっていないのかもしれない。

「ミコト。ミコト。」

はっと目を覚ますミコト。

「ここは？」

先ほどと同じ、木に囲まれてた空間だが、その木々が次第に背を低め、空にはまあるい月がくつきりと見えるようになった。

（テニスコート？）

かわいそうに、先ほど倒れていた二人はまだこの場所に倒れている。

「セイラ？」

「ええ。」

「本当にセイラなのか？」

「ええ。」

「よかった。」

体を起こしたミコトは思わずセイラを抱き締めた。満月に照らさ

れ、お互いの鼓動の音が早く打つのを聞きあっていた。

「…どうして、生きているの？」

どこからが夢なのか分からない状態のミコトであったが、倒れている二人と自分に付けられた傷を見ると、どうやらトカゲと戦ったことは確かなことであるようだった。（じゃあ、セイラが食べられたのは？）

「きつと、ミコトは私がトカゲに食べられたと勘違いをしたんじゃない？」

「勘違い？ちがうのか？」

「ええ。あの時食べられたのは、私が木で作り上げたダミーなの。もちろん、そのすぐ後ろに私もいたから、危なかったけどね。」

「そっかー。よかった。」

「ええ。ありがとう。」

第25話　く決着の後く（後書き）

セイラは、食べられてませんでした。

大方、予想されていたと思いますが・・・。

変な気苦労をさせてしまっていたら申し訳ございません。（そんな熱心な読者様がいれば嬉しい限りですが。）

戦いがひと段落着きましたが、虚無羅との戦いは始まったばかりです。

ただ、個人的には戦いばかりにならぬよう配慮したいと思います。次はセイラの母親の登場です。

筆者コーナー

「最終兵器彼女」って漫画、知ってますか？実写版にもなったようですね。

なかなか面白い展開です。北海道が舞台のSF戦争物ですか？漫画家で戦車とか戦争の兵器のことに詳しい方多いですね。なんででしょう？

第26話　帰宅

（セイラも無事だったし、俺の傷もあの後セイラが癒^いしてくれた。もちろん、まだ2本の傷跡は残っている。でも、ここまで治れば十分だ。）

「森には癒しの力もあるの。少しなら体の疲れが取れたり、傷が回復したりするわ。」

「セイラの力って本当にすごいな。」

「ウフツ。ありがとう。ミコトに言われると、素直に嬉しく感じるわ。」

セイラの一言に胸の鼓動が早くなるミコト。目のやり場に困ったミコトは腕時計を見る。

「あつもうこんな時間だ。」

時計の針はすでに10時を回っていた。

「やばい。」

「うつつ…。」

先ほどまで倒れていた二人が目を覚ました。

「もう、いきましよう。見つかるかと面倒なことになるわ。大丈夫。

あの二人の傷も、私が治しておいたわ。折れた骨の方は、まだ痛みはあると思うけど…。」

「そっか、かわいそうなことをしちゃったな。」

そう言って二人は自転車置き場へもどった。

「正門が閉まつてる…。」

「まったく…警備員はいないよな？」

どうやら警備員はいないらしい。二人は先ほどまでは違った緊張感をもちながら、すでに暗くなった夜道を歩き出した。ミコトは

自転車を引きながら、セイラの隣を歩く。夜10時。裏門から家に向かう二人だが、セイラの家は門を出て逆向きにあるらしい。なんと歩いて10分のところにあるという。

「そんなに近かったんだ。親、心配してるだろ。」

「大丈夫よ。…いえ、きつと心配してるわ。久しぶりに遅くなってしまうものね。でも、私は母親には理解してもらっているの。弟には言っていないけど。」

「お父さんには？」

「父親は弟が生まれてすぐに死んでしまったわ。」

「そうなんだ。ごめん。」

「いいの。仕方のないことだから。」

「そっか。親の理解か・・・やっぱり、親に分かってもらわないと無理かな。」

「あれば楽よ。それに、親についている守り神たちも、きつといいように理解してくれると思うわ。」

「そうか。誰にでも守り神っているんだもんね。」

「そうよ。自分からそれを感じようとしない限り…。」

会話を続ける二人を丸い月が照らす。初夏の風が10時だというのにその寒さを感じさせない。電灯の明かりを頼りに、坂を5分ほど下り、角を3回ほど曲がってセイラの家についた。

「ただいま。」

「お帰り、セイラ、今日はずいぶん遅かったわね。」

セイラを見つめる母親。

「心配したわ。傷を作ってるんじゃないかって。」

セイラを抱きしめた。

「大丈夫よ。…紹介したい人がいるの。」

「えっ」

セイラの母親はあつけにとられた表情でセイラを見つめ返した。
「失礼します。」

（気まずいなあ。本当はそのまま帰りたいかったんだけど…。「できるだけ隠し事はしたくないの」って言われちゃったしなあ。）

「まさか、…彼氏かい？」

そういわれて顔を赤らめるセイラ。

「…いやね。ママ。そんなじゃないわ。」

（だよなあ。ハア…。）少し落胆の表情を見せるミコト。

「彼も人の虚無きよむが視みえるの。」

「神崎ミコトです。セイラさんとは、今朝知り合いました。」

（そうか。知り合ったのは今朝なんだ。なんだかずいぶん前に会った気がしてた。はは・・・疲れてるのかな？俺。）

「そうかい。なかなか明るそうでいい子じゃない。」

横目でセイラを見る母親。

「だから、彼氏じゃないわよ。」

「分かってますよ。」

第26話 く帰宅く（後書き）

いやー、戦いの描写って難しいですね。

ここでちよつと一息です。

のほほん系の話、嫌いじゃないということに気付きました。今度は恋愛小説に挑戦か？ありえない。という感じの筆者です。

セイラとミコトの関係はどうなっていくのでしょうか？

感想をもらえるって、すごく嬉しいですね。

作者の励みになりますのでお願いします。

ってか、感想がないとやっぱり続ける気が沸かなくなってしまうのも事実です。

みんな見てくれてるには見てくれてるんだよねーと、常にアクセスカウンターとにらめっこ状態です。

筆者コーナー

今回のお勧めは、・・・パツと思い浮かばなくなってきました。

そうそう、YUIのローリングスターいいですね。某アニメのソングになっていたということは知らなかったのですが、ノリノリの曲が好きみたいです。

第27話　く長かった一日の終わりく

セイラを家へ送り届け、セイラの母親にまであいさつをしたミコト。いやな気持ちはしていなかった。時計はすでに夜の11時を回っている。（こんな遅くに帰ってきたことなんてないぞ・・・。）ドアノブに手を掛け、少しの間硬直するミコト。その時、玄関の明かりが付き、ドアが押し開けられた。正面にはミコトの母親と妹が目を見開いて立っている。

「よかったー。お兄ちゃん。生きてるじゃない。心配したんだから。」

「・・・ああ、ごめん。」

「わけは後で聞くわ。まずは中に入りなさい。」

運のよいことに今日は金曜日だ。明日、明後日と早起きをしないで済む。（まず初めにシャワーを浴びよう。）家に帰って緊張の糸が取れたのだろう、体中にたまった疲労が出てきた。ソファにでも座ったら1分と持たず寝てしまっていただろう。

シャワーの蛇口をひねる。熱い湯が左腕の2本の傷にしみる。血痕のついた白い制服はバッグに入れ、Tシャツ姿で帰ってきていたおそらく母親も違和感を覚えたのだろう。ミコトがシャワーから出てくるのをじっとテレビのある部屋で待っている。

「チサ、もう寝なさい。」

「・・・うん。そうする。本当は、チサもどうしてお兄ちゃんがこんなに遅くなったか知りたいけど・・・。」

「そうね。きつと明日教えてくれると思うわ。」

「お兄ちゃん、ついに彼女ができたのかなあ？」

「どうかしら？・・・何かちょっと違う雰囲気だったわ。」

そんな会話をされているとは知らないミコトは、ばつの悪そうな顔をして居間に入ってきた。

「ええっと・・・。今日は、まず、遅くなってごめん。」

「なぜこんなに遅くなったの？」

ミコトはウソをつく癖くせがあった。いや、癖と言うよりも反射的に口から出てしまうのだ。相手に本当のことを知られたくない。きっと知ってしまうと迷惑がかかるという思いが浮かぶのだろう。

「この前友達に貸した参考書、今日どうしても返してほしかったから、電車でそいつん家に行って、…」

（違う。本当のことを話さない…。言うって決めてたろ。）ふと頭にセイラとの会話がよみがえった。（「きっと家族の守り神もいように導いてくれるわ。」…そうだ。言ってみよう。）

「いや、違うんだ。本当は、…言っても、信じられないかもしれないけど…。」

ミコトは母親と妹に、昨日おきた出来事と、今日あった出来事を伝えた。初めは二人とも半信半疑であった。しかし、彼女たちの疑惑を一瞬にして晴らしたのは、やはりポンポンとの同化だった。庭に出て周囲に人気がないことを確認したミコトは、屋根の高さまで飛んで見せた。妹は無邪せんぱう氣に羨望の眼差しで見ている。

「お兄ちゃんすごい。いつでもできるの？わたしにもそういうことできるといいな。不思議…お兄ちゃんがそんなことできるなんて。」

「自分でも信じられないさ。今でも夢かと思う。」

ミコトの目には神に祈っているような母親の姿が目に入った。

「…ミコト。あなたがそんなに立派な使命を与えられたのは、私も嬉しく感じるわ。…でも、今日の傷。虚無というものにつけられた傷なのでしょう？」

「…ああ。」

「これだけは誓って。…絶対に無理しないでね。」

「…分かってる。」

「それと、私たちに、どれだけ迷惑がかかってもいいから、協力できることがあれば言いなさい。」

「…ありがとう。」

ミコトは家族に今までのいきさつを話したことを本当によかったと思っていた。ふと二人を見ると、何か光のようなものが二人の体を覆い、点滅しているように見える。

（そうか、あれが二人の守り神なんだ…。）

「ただいま。」

玄関のベルが鳴る。ミコトの父が帰ってきた。

「お帰りなさい。」

「お帰り。」

「おつ、めずらしい、3人そろってこんな時間まで起きてるのか。」
「ええ。今日はちよつと事情があつてね。あなた、少し大事な話があるの。ミコト、チサ、もう疲れたと思うからもう寝なさい。」

時計は夜の1時を回っていた。

（ふー、長い一日だった。でも、いい日だったよな…。母さん、チサ、ポンポン、サンキュー。）

ミコトは布団に入り、目を閉じた。布団に入るとポンポンに守られているという温かさを感じながら、10秒で眠りについた。

第27話　く長かった一日の終わりく（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございました。次回からは、サトミ（覚えていますか？）の自殺を引き起こした張本人が出てきます。

何でも虚無羅のせいによればいいというものでもありませんが、人の影の部分は、本人以外の何かの力が働いているという考え方もありかなと思います。

とにかく、ここまで読んでくださってありがとうございます。一応、作者の中では、一区切りついたという感じです。よかったよかった。

筆者コーナー

お勧め曲

バンブオブチキン「ハンマーソングと痛みの塔」なんてどうですか？

どんどん強くもつと強くという歌詞が忘れられません。

間話

『ミコト…お主は何のためにこの世界に生を受けたのじゃ?』

「誰だ?」

『誰でもよいことじゃ。なぜお主はこの世界に生を受けたのじゃ?』

「そ…そりゃ親父とお袋が出会って…」

『違う違う、最初に言っただろうが、『なんのために』じゃ、『何を
するために生まれてきたのじゃ』と聞いちよるのじゃ。』

「聞いちよるって、じいちゃんか?」

『ええいつ、質問に答えいつ!』

「分かったよ。…なんでだろ?そんなこと言われても分かんないよ。
あつ、そうそう。当分は虚無羅退治つてのがあるかな。この前も危
なくやられるところだったし。…」

『そうか。では、神の望みは何じゃと思う?』

「神?人間を作ったというあれか?神様のことだよな?」

『そうじゃ。神様じゃ。』

「神様が。ポンポンがいるから、神様もいるんだよな。ってか、ポ
ンポンも神様なのか?」

『まあ、人の言うところの守り神じゃな。守護霊とか、精霊とか言
われちよる。』

「そうか。神様の望むこと?なんだろ?世界平和か?」

『なぜじゃ?』

「いや、適当に言っただけだ。」

『頭の弱い男じゃ。もうちょっと修行せい!』

「な…なんだよいきなりっ。」

『そんなことでは、これからの勤めが危ぶまれるのう。』

「これからの勤め?やることがあるなら言ってくれよ。」

『もっ少し自分で考えることじゃな。ふおっふおっふおっ。』

（・・・はっ、夢か。なんだったんだ？まあ、夢だからいいか。）

間話（後書き）

ミコトも忘れる夢の中の話というのが設定です。

人がどうして生きるかとか、なぜ生まれてきたのかって、難しいですよ。それを考えていると眠くなるという特技が筆者にはあるようです。最近気がつきました。もしよかったら、読者様方の考え方を下さい。

執筆の参考にしたいと思います。

ではでは^^

第28話　く新たな一日の始まりく（前書き）

本編第二章の始まりといったところです。

ミコトとポンポンののんびりとした会話です。

いろいろとつっこみどころはあると思いますが、勘弁してくださいね。

第28話　く新たな一日の始まりく

まるで昨日までの出来事がうそかのような清々（さすが）しい朝の光によってミコトは目を覚ました。不思議と、昨日の疲れは感じられなかった。セイラに癒してもらった効果が大きかったということもあるが、家族に真実を話し、それが受け入れられたということが何よりもミコトの心を軽くした。

「ああー、いい朝だな。」

ミコトの隣にはポンポンが丸くなって寝ていた。（こんなかわい
いやつが、自分の守り神なんて、信じられないよな。）

耳をピクツと動かしたポンポン。人間と同じようにあくびをして
いる。

「おはようポン。」

「ああ、おはよう。…なあ、ポンポンって自分の守り神なんだよな
あ？」

「当たり前ポン。」

「前にも聞いたけど、何をしてくれてんの？」

「うーん、難しいポンな、…。まずは、ポンポンはミコトが幸せな
人生を送れるように導いてあげることが仕事なんだな。仕事とい
うか、趣味というか、…。」

「へえ。って、趣味かヨ…。守り神ってみんなについてるんだよな
？」

「そうポン。生まれた子には必ず守り神がついているはずポン。」

「…だったら、悪いことをするやつなんて、いなくなりそうなの
に…。」

「うーん、そこが難しいポン。守り神もがんばってその人がいい人
生を送れるように協力は惜しまないポン。ただ、やってあげられる
ことは、実はほとんどないポン。さっきも言ったように無意識に語
りかけたり、ある程度危険から遠ざける予知をしてあげたりするく

らいポン。人が与えられた命をどう生きていくかは、やっぱりその人の選択にかかっているポン。」

「そうなんだ。」

「そうポン。で、ポンたち守り神も、その人たちのあったかい思いがないと、どうしてもその人に憑いていられる元気がなくなってしまうポン。」

「そっか、それで守り神が憑いていない人がいるんだな？」

「そうポン。守り神の力の源は、‘ありがとう’や‘生きててよかった’というその人の思いポン。そういう願いや思いがあれば、守り神も元気でいられるから、本人もたいていい気持ちで過ごせるポン。」

「そっか。…でもさ、人間って、うまくいってるときはいいけど、調子悪いときはなかなかそう思えないもんなんじゃないか？」

「そこは、すごく大事なところポン。でも、実際はそうじゃないポン。例えば、本人の魂を磨くためには、必ず苦しいことが必要になってくるポン。そうしたときは、本人が辛い、苦しいって思えても守り神も耐えることができるポン。でも、幸せを幸せと感じなかったり、いつも満足しなかったり、他人のせいばかりにしていたりすると、ポンたちはどうしようもなくなつて、先にポンたちが消えてしまうポン。」

「そっか、なんか、じいちゃんが言ってたことを思い出すよ。『いか、ミコト、お前はありとあらゆるものに生かされているんじゃないか、感謝の気持ちを忘れちゃいかんぞっ』って。」

「そうそう。その気持ちがポンたちの元気のもとポン。」

「へえ。じゃあ、ポンは、きっと大丈夫だよ。オレは今、すごい感謝してるから。」

「エヘヘヘヘ。」

第28話 〱新たな一日の始まり〱（後書き）

なんか、ポンポンとミコトとのノロケになってしまいましたね。次からは、少しシリアスになっていきます。

シンジとその虚無羅の話がメインになっていきます。

筆者コーナー

バンブオブチキンの「メーデー」

この、メーデーは労働者が春に行う春闘ではなく、フランス語の救難信号という意味だと思っています。

第29話　く闇にとらわれたシンジく

（もう、学校へ行けない…。）

「シンジ、開けなさい。どうしたの？」

「来ないでくれ…。」

「ねえ、どうしちゃったの。何がおきたっていうの？」

「母さんには関係ないだろ。もうかまわないでくれよ。」

（なんでこんなことになった？サトミが自殺をしてからか？いや、俺があいつに告白してからか？関係ないやつまで偉そうに言いやる。「あなたがサトミを振ったから、サトミは自殺したんでしょ。」だと、冗談じゃない。こっちは振られた上に、濡れ衣まで着せられたんじゃ、やってられないぜ。クラスの奴らはきつと今頃俺のことを話して笑ってるんだろ。う。）」

「う…」

口に手を当てて急いでトイレへと駆け込むシンジ。

「うえええ。」

（気持ち悪い。胸が苦しい。誰か助けてくれ。）トイレの床にひざをつき、かがみこんだ状態で嘔吐を繰り返すシンジ。

「シンジ、大丈夫？学校には欠席の連絡を入れておいてあげるから。後でいいからどうして何も話してくれないのか聞かせてね。」

シンジの目の下には隈ができ、ここ2、3日で別人のような雰囲気^{かも}を醸し出していた。

「シンジ、開けなさい。学校を欠席までしたんだから、理由くらい聞かせなさい。母さんだってパートがあるんだから。」

（くっ。こんなに苦しい思いをしてるのに、なんであんたの都合にあわせて俺が言わなきゃならないんだ。）

「うるさいっ。」

「シンジ、親に向かってその言い方は無いでしょ。あなたそれでも

高校生なの？自分のことくらい、自分で説明できなきゃだめでしょう。もう行くからね。どうなっても知らないから。」

（うるさいな。…母親でさえ、自分の心配なんかしていないか…。）
「静かに、してくれよ…。」

シンジの目から涙があふれていた。

（チクシヨー。なんでこんなに嫌なことばかり考えるんだ。くそっ、くそっ。）握り締めたこぶしを思い切り壁にたたきつけた。ドンツという音に異常を感じたのか、シンジの母親は慌ててドアをせわしくノックする。

「どうしたの？どうしたの？シンジ？シンジ？」

「うるさいっ。はやくパートに行けよ。」（本当はどうでもいいくせに。）

「これ以上私に心配を掛けないで。」

（…ほら、結局は自分のことしか考えてないんだろう。）

シンジは引き出しの中にあつた果物ナイフおもむろにを取り出し、きつく握りしめた。

第29話 闇にとらわれたシンジ（後書き）

またまたシリアル場面です。

極端かもしれませんが、苦しいときや、辛いときって、気持ち悪くなったり、

どうしようもなく感じたりするときってありますよね。

筆者コーナー

ホーリーランドという漫画おすすめです。

まあ、けっこうバイオレンス系ですが。

主人公の悩みとか、強くなる姿とか、見ててスカッとするときもあり、なんたらかんたらです。

第30話　　闇の所業

ナイフを握り締めたシンジに、急に恐怖が襲った。それは自分自身に対する恐怖だった。

（何を考えてるんだ。…これで母親を刺すつもりだったのか？）
しばらく体の震えが止まらない。

（死んだほうがいい？）

恐ろしい考えが頭をよぎった。右手に握られたナイフ。そのナイフは持ち主と同じ左手首へとあてられた。刃が皮膚に触れる。

（俺が生きていたら何をするか分らない。）

ナイフにかける力を次第に強めていくシンジ。うつすらと赤い線がその左手首に引かれた。

（…だめだ、できない。）

その時、自ら命を絶とうとしていたシンジはあまりの恐怖にその場でまた嘔吐した。あふれ出す涙とともに、計り知れない虚無感がシンジを襲った。

（どうすればいい？）

「シンジ、もう、わたしは行くからね。」

「ああ。大丈夫だから。」

必死に何も無かったように装うシンジ。それを聞くと、シンジの母親はパートに出かけてしまった。おそらく4時までは帰ってこないだろう。初めて理由なく学校を欠席したシンジ。右手に握られていた刃は、知らず知らずのうちに、また左手首に掛けられた。

（「シンジ、自殺なんて、しないよなあ。」「あつたりまえた。振られたのは一度や二度じゃないぜ。」）

ふとよみがえったミコトと交わした言葉。

（そうだ。こんな情けないことで自殺なんてできるか。）

気を張って見たがやはり体を覆っている虚無感が取れない。

（くそっ、なんとしても今日一日生きてやる。）

それは死に対する本来のシンジの抵抗であつた。生きるということがこれほど怖く、苦しく、気持ち悪いという感覚を、シンジは初めて知るのであつた。

（生きてやる。生きてやる。）

シンジは襲ってくる死への恐怖に対し、ただもうそれしか考えられなくなっていた。

（しぶといやつだ）

シンジには聞こえない声で、確かに何かがつぶやいた。

第30話　く闇の所業く（後書き）

シンジはどうなってしまうのか。

その想像は読者様におまかせします。

筆者コーナー

バスケットやテニスも好きです。

バスケット漫画「スラムダンク」はもちろん、

最近だと「アヒルの空」（マガジン）がおもしろいですね。　^^

第31話　闇からきた者

シンジにはもちろん見えていない。ただその姿かたちを目にしていたら、おそらくほとんどの人間がその場に腰を抜かしてしまうだろう。サトミを自殺に追いやった虚無羅きよむらがシンジの肩に腕を伸ばしている。

頭には大きな2本の角があり、顔は牛のよう。赤く光る二つの目玉に人間のような体。その背中からはこうもりのような羽が伸びていた。

シンジは胸の苦しさを何かにぶつけられずにはいられなかった。枕を投げつけ布団をけり、壁を殴りつけた。わけのわからない悔しさと虚しさで目からは涙があふれ出ていた。

＜お前が死ぬことでまた仲間が増える＞

恐ろしく低い声でその悪魔のような虚無羅きよむらは囁く。

時計の針はすでに昼の3時を回っていた。シンジはまだ何も口にしていない。シンジはずっと死との戦いに向き合っていたのだ。しかし、それを理解できるものはいなかった。

（ここにいてはまずい。）

ふと、母の帰りが頭をよぎった。シンジは急いで家を飛び出した。（どこへいく？できるだけ人のいる所へ行こう。）

シンジはスクーターに乗り駅の方へと向かった。その姿はまるで何かに追われているようだった。交差点に差し掛かったところで信号が赤になった。信号機の赤いランプの色が先ほどの左手首に赤い血の傷跡を思い出させた。

ちょうど中学生のグループが横断歩道をわたっている。笑いながら話をしているのが目に付いた。

（「あの人サトミに告白したからサトミさんは自殺したんだって。」「えー、信じられない。あの顔で？よく告白なんてするよね。」

「ありえない。」「終わってるよね。」「

（な…なんであんな中坊がそんなこと知ってるんだ？）シンジの額
はいつの間にか汗が滴るほどにじんでいる。心臓の鼓動が早い。も
しろんこれはシンジにしか聞こえない幻聴だ。しかし、シンジには
幻聴を幻聴としてとらえるだけの気力は失せていた。

（「そうそう。こいつ、自分の母親を刺そうとしたんだぜ。」「そ
んなやつが生きていてもいいのかよ。」「死んでくれたほうがよっ
ぽどいいよな。」「行き交う人全てが自分のことを嘲笑あざわらっているか
のようだ。（「どうして私を殺そうとしたの？あなたのような子は
生まなければよかったわ。」「

シンジの息遣いはどんどん荒くなり、喉がからからに渴いていた。
頭の中は今にも貧血を起こすときのような、白と黒のモザイクのよ
うな映像がちらついている。耐え切れなくなったシンジの精神は赤
信号を無視してスクータのアクセルを全開にしまった。車の流
れがとだえていないその交差点では、シンジのスクーターをよけよ
うとした車同士が接触をし、それを避けようとする車のクラクシヨ
ンの音が響き渡っていた。かろうじて出会いがしらの接触を避けた
スクーターであったが、後ろから追突された車がシンジのスクータ
ーにぶつかり、シンジは反対車線の急ブレーキをかけた車のフロン
ト部分まで弾き飛ばされてしまった。

車から降りてきた青年が叫んだ。

「誰か、救急車、救急車を呼んでくれ。」「

騒然となったその場所には、15分ほどで救急車が駆けつけた。

救急隊員が駆けつけてもまだ、黒いヘルメットの内側の青年の目は、
閉じたままであった。

第31話　く闇からきた者く（後書き）

シンジは大丈夫なんでしょうか？自分で書いておいてよく言います
が……。シンジのキャラをもうちょっとはつきりさせたほうがいい
いとも思いますが、それは後々にします。

筆者コーナー

今、見てみたいのが、銀色の髪のアギトです。

自然が人を襲う未来……。過去からやってきた少女。うーん、D
V借りてこようかなあ？

第32話　～シンジを救え～

ミコトが目覚めた土曜日の朝、不意に居間の電話がなった。（誰だろう、こんなに早くから。）朝食をとっていたミコトは、受話器に手を掛けた。

「もしもし、神崎です。」

「こんにちは。小山ですが、ミコトさんはみえますか？」

「えっ、僕ですが、もしかしてシンジ君のお母さんですか？」

「ええ。いつもシンジがお世話になっています。」

「いいえ。どうしたんですか？」

「あの、昨日、シンジが…。」

電話の奥で急に嗚咽おえつを堪こらえる声が聞こえた。（何かあったんだ…）

（ミコトの脳裏に浮かんだのは、昨日死闘を繰り広げた虚無の姿であつた。その勘がはずれていることを願うミコトだつた。

「大丈夫ですか？落ち着いて聞かせてください。シンジに何かあつたんですか？」

「…今、総合病院にいるんですが、…シンジが、事故にあつて…。」

シンジの母親の話を整理すると、シンジは一昨日あたりから調子が悪く、精神的にも不安定だつたそうだ。母親がパートに出ている間、昨日の昼過ぎにシンジの乗っていたスクーターがはねられ、意識不明で病院に運ばれた。今朝になってようやく目を覚ましたシンジは、俺の名前を口にしたそうだ。

「分かりました。一度そちらに伺つてもいいでしょうか。」

「ええ。きつと息子も喜ぶと思うので…。」

ミコトは母親に用件を伝え、急いで着替えを済ませ、バスに乗つて総合病院へ向かった。母親がありあわせのタオルやら果物やらを持たせてくれた。

『ポンポン、どう思う?』

『シンジ君のことポン?... なんとか分からないポン。もし気になるなら少し様子を見てきてもいいポン。』

『えっ、そんなことできるのか?』

『できるポン。たぶん10分くらいで行ってこれるポン。』

そういうとミコトの守り神であるポンポンはバスの窓を通り抜けて総合病院のある方へと向かっていった。ポンポンとミコトは青色に光る一本の線でつながれていた。

総合病院はミコトの家から30分ほどバスで行ったところだ。バスから神城高校のある丘が左側に見える。その中腹には山神セイラの家があるはずだ。

休日といっても土曜日は普段なら午前中に部活がある。剣道部であったミコトは、昨日、退部届けを出してきたところだ。寂しい気持ちもしていたが、昨日のようなことが続けば、どちらにしろ部活をしていられない。色々と聞かれるよりも、初めからやめておいた方が賢明だったんだ。ミコトはそう自分に言い聞かせていた。

バスの中でふと頭をよぎることがあった。(もしシンジが虚無羅にとりつかれていたらどうする。)

ミコトはシンジが精神的に参っているという言葉聞いたときに、何か違和感を覚えていた。やはり、考えてみると、虚無羅がシンジにとりついていてという可能性は少なくない。

(虚無羅がいた場合を考えておかないと...)。まずは、シンジから影を引き離すのが先決だな。この前セイラがやったように、一人が影をひきつけて、その間に本人に触れて抜いの詞を唱えるのが一番いい。でも、セイラがいない一人のときは... 影と戦いながら本人に抜い詞を唱えるのか... 厳しいな。しかも、影を消したらシンジも死んでしまっただったよな。あとは、シンジの体に虚無羅が乗り移っ

た場合か、シンジを動けなくして抜い詞を唱えればいいのか…。今のシンジは、きっと動けるような状態じゃないから、乗り移られることはないだろう。）

一人考えをめぐらしていると、ポンポンが帰ってきた。

『やばいポン』

『どうした？』

『強そうな虚無羅がいたポン。』

『やっぱりか。…ポンポンはどうすればいいと思う？一人で対処する方法が、なかなか思い浮かばないんだ。』

『うーん、セイラに頼んでみるポン』

『そっか。セイラには悪いけど、それが一番だな。一度バスから降りて、電話をかけようか？』

『その必要は無いポン。ポンがリリイ（セイラの守り神）に念をおくるポン。』

『えっ、そんなことができるのか？』

『フッフッフ。できるポン。』

『ちよっと待ってるポン』

目を閉じたポンポンは何かブツブツと唱えだした。

『かけまくもかしこき いざなぎのおおかみよ わがおもいをそのみこころにより つたへたまふことを かしこみもつす』

暫く目を閉じていたポンポンの目が開き、

『リリイもセイラもその病院にかけつけてくれるポンよ。』

とミコトに伝えた。

『そうか。やったな。サンキュ。』

（これでどうにか虚無羅に対応できそうだ。）

第32話　　シンジを救え（後書き）

シンジにとりついている虚無羅との戦いがせまってきました。ミコトの成長振りは見られるのでしょうか？

筆者コーナー

本屋って楽しいですね。いつまでいてもあきません。

雑誌読んでも時間を忘れてしまいます。

科学雑誌とかも好きです。ニュートンもいい。けど、高い＞＜

第33話　～総合病院で～

総合病院に到着したミコトは、セイラの到着を待つために待合室に腰を掛けた。（病院が、あんまり落ち着かないな。きれいにしているけど、やはりどこか暗い感じがする。）ミコトは待合室に設置してあるテレビを見ながらしばらく待っていた。

ふと周りを見渡すと、そこには栗色の髪が肩にかかっている涼しげな顔をした少女がこちらを見ている。

「やあ。」

「こんにちは。」

「昨日はありがとう。」

「ええ。こちらこそ。ミコトには助けられたし。」

「それはお互いだ。…いきなり呼び出してごめんよ。」

「いいわ。逆に虚無羅きむらが見つかって嬉しいくらい。」

（へえ、自分は虚無羅なんて見つけたくないんだけどな…。）

「うまくできるといいけど。」

「そうね。ここでは、あんまり私の力は使えそうに無いわね。」

「確かに。自分も室内だとやばいかな。相手を屋外に誘わないと。」

「そうね。」

二人は簡単な作戦を立てた後、シンジが寝ている4階の南病棟へと向かった。

「403と、あそこか。」

403号室まで後数メートルというところで、ミコトはその体を感じる気配に足を止めた。

「これは、…やばいね。」

「ええ。私も感じるわ。」

「昨日のトカゲとは格が違うな。できるか？」

「ええ。大丈夫よ。」

ミコトは心を落ち着かせて目の色を黒くした。自分の体から出る光のオーラの量を抑えることで虚無羅に気付かれないようにしたのだ。マナの力に覚醒したミコトやセイラは虚無羅に見つかりと襲われる可能性があるからだ。

そして、2本の太い角を持つ虚無羅を強制的に威嚇し、自分へとひきつける役割を、セイラは担っていた。闘牛士の持つ赤いマントの役割に似ている。

セイラは403号室の入り口に立ち、静かに口を動かした。

「オン コロコロ マカリシエイ ソワカ オン コロコロ マカリシエイ ソワカ ……」

セイラの口からその言葉が繰り返されるたびに2本の角を持つ牛のような虚無羅から発せられる黒い気が強まっていくのを感じた。

<うるさいやつだ>

その低くしわがれた体の奥に重く押し掛かるような声を聞いたのは、セイラだけではない。

「虚無羅が喋った？」

その恐ろしさを肌で感じるミコト。（セイラがやばい。）

<ぐをうわああ>

恐ろしい声を上げて、牛のような虚無羅はその背中から生えている両翼をばたつかせ、勢いよくセイラに向かって襲い掛かった。その声はまるで近くでジェット機の音を聞くかのようにびりびりと体に堪えた。虚無羅の両翼は病室の入り口の幅を悠に超えている。その体はまるで牛くらいあり、黒茶の毛で覆われ、足はミコトの体ほどある馬のような足であった。（でかい！）トカゲのときと同じように虚無羅とシンジは黒い縄のようなものでつながれていた。

第33話　く総合病院でく（後書き）

いよいよシンジに取り付いていた虚無羅との戦いが始まります。牛のような虚無羅という表現しかないのですが、今後は敵さんにも名前をつけようかなと思います。できるだけ名前をつけるのは少なくなしたいと考える筆者であります^^；

筆者コーナー

魔法使っていいですね。でも、魔法と霊、どちらを信じるかといえば、霊ですね。魔法はかなり胡散臭いです。ハリーポッターは嫌いじゃないです。でも、突っ込みどころ満載ですよ。どうしてここでの魔法を使わないの？とか。まあ、そんなことを言ったら、たいていのものは落ち着いてみてもらえませんが^^；

第34話　く牛虚無羅との対決く

咄嗟^{とつぜ}にミコトは病室に飛び込み、シンジの体に触れた。可能な限り早く抜^はいの詞^{ことば}を唱えようとした。

<こしやくな！>

セイラを追っていた虚無羅は狙いを変えてミコトへと向かってくる。

ミコトもすばやく抜い詞を唱えた。同時にミコトの体にはポンポンが入り同化の準備は整っていた。

「もろもろのまがごと　つみ　けがれあらばはらえたまい　きよめ　たまへともうすことを　きこしめせとかしこみかしこみもうす」

唱え終わるのが一瞬早かったが、その刹那、牛が突進するように虚無羅は尖^{とが}っている角をミコトの腹めがけて突進してきた。ミコトは咄嗟に虚無羅の額に右足を乗せたが、その勢いのまま、4階の窓ガラスを突き破って虚無羅もろとも病院の外に飛び出された。後ろが壁だったらそのままミコトは押しつぶされていたかもしれない。虚無羅の体は無機質なその壁をすり抜けていた。

「ミコトー。」

叫ぶセイラ。あつけにとられている403号室の人々。シンジも目を覚まし、その瞳はあまりにも不思議な光景に暫^{しばし}く開いたままであつた。隣に座っていたシンジの母親は、

「今の、ミコト君よねえ・・・。」

と言い、看病の疲れや気苦労がたまっていたためか、その場で気を失ってしまった。

虚無羅の角はクロスさせたミコトの左腕に刺さっていたが、自ら後ろへ跳んだ反動で勢いが弱まり、貫いてはいない。（痛^{いた}え！）叫びそうになったその言葉を押さえ、第一優先事項であるポンポンとの同化を叶える詞^{ことば}を具^ぐに口にした。

「オン　コロコロ　ブラフマー　ソワカ」

輝く青色の光がミコトの体を覆い、ポンポンとの同化が完了した。右足に力を入れ虚無羅の額を蹴り上げるミコト。（痛えんだよ！！）刺さっていた角を抜き去り、空気の壁を蹴って虚無羅よりも前方に進むミコト。こうもりのような羽をばたつかせてミコトへと襲い掛かる虚無羅。

窓枠から身を乗り出していた緑色の目の少女は、その一瞬の光景を眼にし、また自分も4階の窓から勢いよく飛び降りた。セイラの体にリリイが入り込み、全体が一瞬緑色の光に包まれた。

「オン コロコロ マカリシエイ ソワカ 森よその恵みの神々よ われに力を与え給え。」

南病棟から飛び降りた先には芝生とその周りに植えられたポプラの木が等間隔ごとに立っていた。一本のポプラの木がセイラのとこるまでつるをのばすと、セイラも紳士に手を差し伸べられたかのようになつるに手を添え、そのままふつと持ち上げられる勢いでポプラのつるに腰を掛け、つるは幹の方へと移動した。セイラはおよそ100メートルほど北側の上空に見えるミコトと虚無羅へ目をやった。

ミコトは風の使い方が昨日よりも数段うまくなっていた。足に風をまとい、蹴り上げる風圧を利用して一気に向きを代えたり、流れる風を集めて虚無羅に投げつけたりしている。昨日のように一気にマナの力を使う方法は、その後気を失ってしまった経験から危険だと感じていたのだ。

しかし、この虚無羅はやはり昨日までの虚無羅とは格が違っていた。虚無羅はミコトの作り上げた風の塊を太腕ではじいた。その風は病院の壁へとぶつかり、壁は白い煙を上げながら、がりがりという音と共に削られるのであった。

第34話　く牛虚無羅との対決く（後書き）

もうちょっといいタイトルがあるだと突っ込みたいのですが、これ以上いいタイトルを考え付かない情けない作者です。牛虚無羅との戦いが始まりました。前回のトカゲ虚無羅より少しでもよい描写ができればと思います。

筆者コーナー

エヴァンゲリオンofシンジ育成計画という別冊を読みました。（別冊なのか・・・？）なんか雰囲気はラブコメ的でしたけど、個人的には嫌いじゃありません。

第35話　く虚無羅対ミコトく

鳥のように軽いミコトの体は上昇していた風に乗る、牛の虚無羅きむろの10m程上に陣取った。

「きつと、あいつは、クイーンクラスの虚無羅だポン。」

両手に風の塊を作り虚無羅に向かって投げつけながら意識の中でポンポンに答えた。

「クイーンクラス？強いってことは分かるけど。」

「虚無羅を他にも作り出せるっていうことポン。こんな危険な奴がシンジ君に憑ついてたポンか？シンジ君もよくがんばったポン。」

「みたいだな。それはそうと、どうしたら勝てると思う？」

「…がんばるポン！ポンはミコトと一心同体だポン。」

「…そうか、ナイスアドバイスだ。」

両手を上に掲げ手のひらを大きく開きミコトは先ほどよりも大きな風の塊を作り出した。しかし虚無羅も待つてはくれない。それを見止めるとすぐさま羽をばたかせてミコトへと向きを変えて向かってきた。

「ぐをおおおお。こざかしいやつめ」

邪悪としか感じられない恐ろしい気迫と声に一瞬体が硬直するミコト。

「なんだってんだよ。」

気を取り直したミコトは、上がってくる虚無羅に正面から向かっていった。

「人間風情が！引きちぎってくれる！」

「これでもくらえっ」

両手を振り下ろし、集めた風の塊を虚無羅に向かってぶつけるミコト。しかしその風の塊は虚無羅の雄叫おたけびと共に二つの角で振り払われた。振り払われた風の塊は、今度は駐車場にとめられていた車を直撃し、窓ガラスが飛び散りタイヤはパンクし、車体は傷だらけ

になっていた。虚無羅の角の根元からも濁った青色の液体が滲^{にじ}んでいた。

そのまま下にもぐりこんだ虚無羅^{きよむら}は硬く握り締めた拳をミコトの腹に向けて思いきり振り上げた。

瞬時に両腕をクロスさせたミコト。そのガードの上から虚無羅の拳がミコトを襲う。ミシミシという骨のきしむ音と共に、ミコトははるか上空まで飛ばされた。角によって付けられた左腕の傷から鮮血が飛び散り虚無羅の顔にかかる。虚無羅は顔についた血を長い舌でなめるとまた勢いよく羽をはためかせ、ミコトが飛ばされた方へと飛んでいった。

（やばい、腕が動かせない。痛^{いて}え。）あっという間に病院がマッチ箱のように小さくなった。（かなり飛ばされたな。肺はやられてないか。）かろうじて右腕に感覚が戻ってきた。（きつと奴は追ってくる。こつちがくたばるまであいつらは死の宣告を免れないんだから。・・・懸^かけるしかない。）

虚無羅が追いつくまでの残り数秒、ミコトはその右手を開き、集められるだけの風を集めた。（ここで気を失ったら、死ぬな…。）ミコトは風の龍を呼び出したとき、一度目は動けなくなり、二度目は気を失った。果たしてこれだけの風の力をぶつけたとき、命があるかさえミコトには確信でなかった。

（さすが高い所だけあって、いい風が吹いてくれるよ。）

ふと眼下に入ってきたのが、一直線にこちらに向かつてくる黒い物体だ。それが虚無羅と認識するまで僅^{わず}かの時間もかからなかった。

（来るっ！）

第35話　く虚無羅対ミコトく（後書き）

どうも^^筆者です。『新世界』も、あと僅かです。

個人的には自分の世界観が出てきて楽しかったのですが、なかなか読み手を引き込む小説になっていたかどうかと思うと疑問視されます。ですので、この戦いではじめをつけて、終幕にしようと考えています。

それでは、あと僅かですが、最後までお付き合いしていただけたらと思います^^

筆者コーナー

お勧めコーナーが苦しくなってきたので、話に関係のない雑話を書いていこうと思います。

好きな人は、イチロー選手です。毎日カレー食べようかなと、真剣に思いました。（そこをまねてどうする^^;）

第36話　く虚無羅対ミコトく

右手に力を込めるミコト。数秒後にはミコトの体と接触するだろう。よほどあの角がお気に入りなのか、ミコトの体を貫いてやろうとする虚無羅の気迫が伝わってくる。(そうは問屋が卸すかってんだよっ) 声にならない声でミコトがつぶやく。できるだけ近くから…。避けられては絶対にだめだとう思考がミコトの頭に働いていた。くぐをおおおお　クタバレー>
頭から突進してくる虚無羅。きむろ

(くたばるのはお前の方だ！)

「オン　コロコロ　ブラフマー　ソワカー！！！」

叫びとともにぶつかり合う二人。およそ真下に向けられたミコトの拳からは虚無羅の顔ほどある風の龍が放たれた。その龍は丁度虚無羅の2本の角の間を通り、その額に噛み付き、暫くの間龍と虚無羅は力と力のぶつぶつかり合いをするかのように硬直状態が続いた。
「うわああああ！」

なんとか意識を保っているが、激痛が全身を駆け巡り、体の一部たりとも動かすことはできなかった。重力に引っ張られ、あれほど軽かった体がまるで鉄の錘おもりになったかのように感じ、真っ逆さまに地上へと落ちていく。

思うことはたくさんありすぎた。(…頼む、勝ってくれ。…勝ったとしても、…俺は…このままじゃ、やばいっ！！！)

「セイラー！」

声にならない声で不意に叫んだ言葉は、昨日出会ったばかりのセイラの名であった。もしも今助けしてくれるとしたらセイラしかない。ミコトは心の中にあるその気持ちに気付いたのか気付かないのか、思い切りその名を叫んだ。

落下を続けるミコト。ミコトの頭に今までの人生が思い出された。

走馬灯が駆け巡っている。

思い浮かぶその過去の記憶から目覚めたとき、ミコトの体は何かを受け止められるようにして落下の勢いがとまった。

「わたし、また何もしてあげてないわね。」

「……いいや、命の、恩人、だよ。」

涙腺を破って出てきそうになる涙を必死にこらえようと、ミコトは重い口を開きながら、できるだけ明るくさわやかに言った。

第36話 く虚無羅対ミコトく（後書き）

筆者コーナー

うただひかるのBEAUTIFUL WORLD も好きです。
エヴァの劇場版の主題歌ですね。見てはいませんが、雰囲気があつてそうです。（昔の話題ですみません。）FREEDOMこの前5話ものがしちやいました。><6話こそ見るぞ!!

第37話　虚無羅対セイラ

セイラに助けられたという安堵感が、ミコトが必死に隠していた痛みと緊張を呼び覚まし、ミコトはまたも気を失ってしまった。

「うふつ。しょうがない人ね。」

何が可笑しいかわからないが、セイラは穏やかな笑みを見せると、やさしく地面の上にミコトをおいた。

病院の隣にある公園の中でも、比較の木が生い茂っているひっそりとした場所にミコトは落ちてきたのだ。木を操り無事に寝かすことができたセイラであったが、次の瞬間、まがましい気配が上から迫っていることにセイラは気がついた。

くうをおおおお>

雄叫びおたけをあげた牛の形をしたミコトの倍はあるうかと思うほどの巨体は、龍の形をした何かに押され、セイラとミコトから僅か10mほどしか離れていない林の中に突っ込んだ。

虚無羅も無機質なものは通り抜けることができるが、土や木などはその質量を感じる。砂煙とともに半径3m程の半球状の穴ができ、その中心には虚無羅が埋まっていた。龍の姿は消え、あたりに放射状に勢いのよい風が吹き、セイラの髪を掻き揚げた。

（まだ、虚無羅の核が残ってるわ…。）

セイラは木に手を掛け、すぐにつるを虚無羅へと伸ばした。

穴の中心から砂煙が立ち、太い右手が地面をつかんだ。その右手に力が込められ、起き上がってくる巨体を支えていることが分かった。その右腕を木のつるがつかみ、つるによって引き上げられた巨体に、瞬時にその左手と両足とにつるが巻きついた。

くぐをおおお>

「オンコロコロマカリシエイソワカ」

力を込める巨体にセイラもマナの力を強めて対抗する。

「瀕死なのに、すごい力ね。でも、無駄よ。」

巨体の首にはまた新たな木のつるが巻きつき、その首を締めつける。

<ぐわああああ>

痛みにも似たその雄叫びとともに、巨体はさらに力を込める。

「くっ、なんて力なの…。もう、限界ね。」

額に汗の滲むセイラが手をかざし、その手を自分のほうへと勢いよく引き戻すしぐさをすると同時に、新たな5つの太いつるが今度は先端を尖らせ、巨体へと向かっていった。次の瞬間、

<ぐわああああ>

という悲痛な叫びとともに、巨体は5つのつるに貫かれ、獣のそれと同じようなしぐさでどす黒い青色の液体が飛び散った。

<お前たちが憎い…殺す…殺してやる…>

心の底まで響くような低い虚無羅とは対照的なもの静かな声で、セイラは次の言葉を口にした。

「そうね。私もあなたたちが憎いわ…。」

巨体はつるに貫かれたまま動かなくなり、体は次第にその色を薄くし、セイラの目にもその姿を認めることはできなくなった。

「浄化、完了。」

緑色に輝く瞳には、悲しみや憎しみの感情が垣間見られた。かいま

第37話 虚無羅対セイラ (後書き)

長く長くお休みしてすみません。

パソコンが壊れてました。

心よりお詫び申し上げます。

もうすぐ最後になりますので、お付き合いお願いします。

読んでくださりありがとうございます^^

最終回（前書き）

これで最終回となります。

お付き合いくださり、本当にありがとうございました。

最終回

割れた窓ガラスの先を見つめるシンジ。

「何があつたんだ？」

わけもわからず首をかしげるシンジ。

「あいたたた…。そっか、俺、事故にあつたんだ。」

不思議と昨日まで感じていた心の中のもやもやは晴れ、体が軽く感じていた。すぐに看護婦が駆けつけ、病院の窓ガラスを交換し、あたりを掃除している。患者にけが人がいない事を確認すると、ほつとしたようにまた受付へ戻る。

（あ、あの女の子、たしか窓から飛び降りたよな？夢か？）

頭の中が混乱していた。

（でも、なんだか今までの胸を締め付けるような苦しさが無い。）

なにが起こったのかは整理できないシンジであつたが、胸の苦しみが取れたこと、不思議と生きる意欲がわいてくる心の変化を感じ、その目にはとめどなく涙があふれていた。

（…不思議だ、寝ているときにミコトが見舞いに来てくれた夢を見た。）

あたりが騒がしくなってくるのを察し、セイラはミコトと共に木のつるに支えられ、できるだけ人目に付きにくい林の奥へと移動した。

「また、眠っているわね。」

穏やかな笑みを見せると、ミコトの左腕の傷跡に手をかざし、優しい声で何かをささやいた。

「オン コロコロ マカリシエイ ソワカ。恵みの神よその慈悲をもつて癒しの力を我に与え給え」

セイラの手から強い緑色の光が発せられ、出血が止まっていなかったその左腕の傷は、ゆっくりではあるが、しだいにその傷をふさい

でいった。

「さすがに、疲れるわね…でも、あともう少し。」

先ほどの戦いでマナの力を使い過ぎていたセイラには、ミコトを癒すことでさえ、汗が滴り落ちるほどの過酷さがあった。

ふと起き上がると、そこは林の中、隣にはセイラが眠っている。栗色の髪の毛と雪のような白い肌には土がつき、何か大変な作業をしていたという様子を思わせた。

（「セイラ。」）と、声を掛けようとしたミコトは今の状態をそう難しくなく把握できた。（左腕の傷を治してくれたんだよな。ありがとう。）

ミコトはゆっくりと起き上がり、セイラを背負う。よほど疲れていたのだろうか、セイラはその動作にも目を覚ますことなく、揺られるがままにミコトに背負われ、共に帰路についた。

「シンジの見舞いは明日だな。ごめんな、シンジ。」

病院を振り返るミコト。壁にはミコトがつけた傷がいくつか残っている。なにやら病院の周りがいつもよりあわただしいという雰囲気を感じたが、もうピークは過ぎたというように、人々は病院から散り散りに去っていく様子だ。

ゆられる体がセイラの意識の回復を早めた。（あ、そうか、私、ミコトの傷を癒そうとして、そのまま眠ってしまったようね。）うつすらと目を開けるセイラ。ミコトが一生懸命にバス停へと向かっている。その横顔には夕日が差し込み、うつすらと額に滲む汗は、ミコトを少年から男へと変化させているようだった。

少年と少女の旅は　ここから新たに始まろうとしている。

しかしそれは、少年と少女だけではない。

この世に生きる人が、全ての人が

生まれた意味を、幸福を求めて

旅をしているのだ。

セイラは言う。

「わたしたちは　きっと特別ななんかじゃないわ。

今に生きる全ての人が悩み、孤独になり、それでもがんばっていき
ているのね。」

「ああ。でも、だからこそ　きっと　人は　よくなるう、一緒に生
きようと

進化していくんだ」

「そうね。わたしも、・・・あなたと会えて　よかったわ。ミコト。
」

＝ END ＝

最終回（後書き）

いかがだったでしょうか？

話の続きも考えていなかったわけではないのですが、なかなか忙しくなってしまったので、このあたりで失礼します。

何か感想をいただけたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1528d/>

新世界

2010年10月8日15時51分発行